言海原稿

第三号

洋学文庫
文庫8
A 149
9

言海原稿 第三号

あ 終

大正九年二月十五日

大槻文庫

特
118
199
(9)

あるべき　其用ヲ大抵ニ於テ名アリ

ものゝ　オテンキズ……

あたむ

仇ハ敵ニ用ユ

仇ハ敵ニ用ユ

敵 カタキ

仇ハ敵ニ用ユ

「カニノ三十四「敵見タル虎カ吼ルト、諸人ノ恊コルマデニ」

仇トナル、ムカフ、宝鏡七十六「快、強也、心服也、阿太年」名義抄「鏡、アタム」

源玉葛、十三「此殿ニあだまレテハ、イサカノ身動セムモ所狭クナムアル」キ」

あたーや 徒矢

盛衰記二十三「鏡ハ二領、三領ヲモ射貫キ候、徒ニあだ矢射ル者ナ」

備前老人物語「美ニツメ引キヅメ敵ヲ射ルニ大カタあだ矢ハナシ」(信長公・文ノ士ナリ)

身方コレカ為ニ勝ツトヲ思ヒ

あだ夢

空シキ夢、ハカナキ夢 謡曲、忠度「憂キ世ノ、あだ夢ノ覚ムル枕ニ鐘遠キ」

あだ夢 あだ夢ノ覚ムル枕ニ鐘遠キ

あたまづく（副）（天文コリノ三文）初ヨリ、テンガラテンデ、「あたまづけ」

あたまきん　天文金　えびきん金

あたらし（形ニ）「可惜」惜シ、惜シムベシ

あしかせ　足械　かし（枷）ノ條ヲ見ヨ

あたらし（接尾）「可惜」

あたらし　新キ「新」（アタラシ）新シ、顛倒、平安朝以後ノ語ナリ

名義抄「新、アタラシ」　改マリ、古ヘノ反（アラタナリ）

世俗ニ太歌所「あたらしき」、あたらしき、新キ

拾遺　西園寺「あたらしと何ニ命ヲ思ヒ出ベ古ク」（ナリヌ）（キ身ヲ）（「可惜」ヲカキ）

あぞ（副）何　ナニゾ、ナド、アド、

景行紀十八年有、肥後国安蘇「吾ニ人在、何無人耶　故號其國曰安蘇」

あたらしや　夕ヤミニケアケヤクヲヤレヤあたら夜ヲ

あるーつり　穴釣　鰻ヲ釣取ル方法、潮入ノ小溝、木石ノ間、橋基ノ石垣ノ透間ナドニテ汐ノヨリニ水底ノ穴ヲ窺ヒテ釣ル

あるまた（名）麻柱（扶翼ノ誤）支柱ノ義　古ヘ工人、支柱ニ縁リテ高キニ登リシニ、ヒルト云ヒ、アグラ、足代、足場、天治字鏡、三ノ三十七「麻柱、阿奈奈比須」（問架）

和名抄十五ノ六「麻柱、阿奈奈比」

竹取物語「男子ノ如キ二十人バカリ、ツバ、ニテ、あるまたニ上デスヱコヒ」宇治拾遺、十四「あるまたトモ結ヒ名、許ニ立チマハリテ」

あるーまふ　他ニ「扶翼」（ナ）ノ誤リ、活用、勞リ助ケ、護ヒ、誘フ、諾フ

王臣百官人等ニ、弱ヲ扶ケ、強ヲ挫ク

助ク、輔助ス、扶助ス、往生、四、慶雲四年七月詔「阿奈奈比奉リ輔佐ケ奉ラム」三代実録三十八、元慶四年十二月「天下政ヲ相ヒ奉ケ奉ル人ナリヌ」

藤原基経傳、太政大臣、第条

あるゝに忘れ（白）

研哉美哉（八に八愛ル意、忘れ難し）

嬉美麗ニキ哉、神代化上ノ、「研哉可愛少男哉」研哉、此云「阿那而恵夜」

同七「美哉善少男」古事記上ノ三「阿那面、在志、愛袁登古袁」（此ノ夜

志も歎辞ナリ）

あるに忘れ（白）あるに忘れつゝ見る

あるゝ多 穴住 上代、人民ノ土窟ニ住ミタルモノ、ツチグモ、エミシナド云ヒシ是ナリ今モ各地ニ其遺跡アリ

神武紀元年白三月「民心朴素、巣居穴住、習俗惟常」同紀ニ土雲ガ忍坂ノ大室屋ニ住ヒシヲ記セリ

あるゝたみと 名 安名尊 徒国玉、曲尽「のりつゝ」今日ノ、事サヘ、古ヘモカクヤアリケム、今日

あるはじかみ 薑（漢一はじかみ、薑カ）

薑のはじかみ、同じ、後ニ云フ生薑、和名抄十六ノ九「生薑、久礼乃波之加三、俗云

阿奈波之加美」

乞ノ公ヤミ
呉薑

アナーはとり 穴織 漢織（漢、唐著あぬ、轉たべし（倭、信濃、因、因幡）

あちト

呉薑ヲ あるはじかみと云フ 漢薑ナリ はとりハ 織ノ約

延喜式天皇 市代 漢土ヨリ宮サル 機織女 漢織モ同ジモノナリ

紀三十七年ニ

呉織穴織上

五（呉）あや（漢）あ

やはとり 倭ヲ見ヨ

（倭ノ詩、漢、国因情例、尚漢俗ヲ見ル）

はとり（呉織）（漢・唐音あり、轉ナベシ）（漢ノ俗ノ飛鳥俗）呉・薑

ヲあるはじかみト云フモ芸薑ナリ（鄭俗ノ芸薑）

支那ヨリ伊アヤセレタル機織女、（はとり・鄭織ノ約）漢織モ同ジモノナリ

遣沙化三十七年二月「遣河和使主、都加使主ヲ呉ニ令報織工女」（呉王

赤烏元年呉使張温元興ヲ来ス）

遣沙天皇御代ニ来漢土ヨリ織工女ノ呉織・漢織ヲ召ス（呉・漢）

（呉ノ俗ヲ見ル）

あるかぶき　穴太築　織ノ石垣ヲ築方ノ名、織田信長ノ近江ノ安土城ノ築ク時
（同国穴生ノ地ノ石工ヲ役シタルヨリ起ル。隨テ此ノ築方ナル
石工ヲ穴太ト云フ（明良洪範ニ委シ）

あるかぶき（白）　噺、目新シイ意ニアラズ、雷門下ノ第女（二十七）ノ後ニ備後国ノ品知牧人ト云フ
者同国ノ芸者田竹屋ニ頼リシニ「有ル呼音、痛目美ニ明日見ル有ル一幕ノ芸能」
目元ノ所第三場「竹解免」トアリ其雷ニ恩ヲ報イズト記セリ江家次第十四ニ
在五中将陸奥ニ到リテ野ト所ノ屋ヲ求メシニ「終夜有聲曰秋風之吹仁附天モ
阿那目阿那目、後朝ノ恋ノ謎目中有「野蕨在五中将陸奥ノ野ニ出ル波不成
草出ル陸奥歌」トアリ此ノ歌、古事談ニ代表ス、四句目初ノ中ノ抄ノ六ニモ載セタリ

あるかぶき　穴太　あるかぶき

あるかぶき（白）　あるかぶき、音便あんかぶき、約濁行業十四、「對面ニ関エマホニデ」ナンカブキ

モあるかぶき」　芸花、花山「ソレカルコノ歴史ハ」

あにい（兄）　東京ニ中中ニテ男肌ノ若者ヲ呼ブ語、大辞

あにがせ　「兄御前」（御前、俗ヲ見ヨ）兄ノ尊称、異ヲ女ニ対ス

曽我物語　「工藤一族トヤラムニ射ラレテ死ニタマヒヌト兄ガセハ語ラタマフ」

（曽我物語巻二條）「何ヲ思ヒヤ（バヨヤ）あにがせハ白ヒノ山ヲ見ヲサメミ歎キヤタマフヤ」

あにがたひ　「兄人」（はがたひとヲ見ヨ）兄ニテ人、兄

あにがね　「兄金」　偽ニ兄ト云フ者ニテ人、親分ニ分ル日隠リ義兄
（弟ノ姉ノ）

あねこ　「姉子」（あねさノ音便あねこノ訛）　東京ニ中ノ者
（東京ニ中ノ者）

あねき　「姉貴」（姉ノ異、あにき、ちきさ、ちきさ、ちりり）
姉ノ尊称、壬生大念仏上「姉きハ奥（入リ姫ト中善ウシタマヘ」

あねご　姉子（姉ノ女ノ略ニテ後ニ子形女ノ云フ）　出女場、出屋、
（京都ノ娘ノ成寺「恋ノ姉貴」）
長唄

あねこ　姉子　若キ女ヲ親シミテ呼ブ語　寛平御歌合「日本武尊ノ歌」「ヤマトタケノミコト　ヤ　アヅマ　ハ　ヤ　ヒ　ヤ　ヒ　ヤ　ヒ

あは雪どうふ　淡雪豆腐　きぬもしどうふに同じ

あはて（二）　あわつ　狼狽（ロウバイ）の俗語

あばら家（アバラヤ）　荒廃（アバラ）した家（ヤ）荒（アバラ）ら屋（ヤ）

あばらーそど　荒筆戸（二）筆戸（破ヒタルモノ）の隙間多キヨリ（三）結ビタル襖屋　戸ノヘキ　アバラ

あばらしどうど　荒障子　破ヒタルモノ　ヤブレシヤウジ

十ノ[illegible]

△(三)壊し破シテ障間多キ

あばら（名）荒（アバラ）屋（ヤ）（荒廃シタル家）荒キ障間ニテ聞キ（一）戸締ナキ。アバラスド。

伊勢物語ニ「あばらなる板敷ニ月の傾くまで臥せり」とあり。「あばらなる蔵ニ女ヲバ奪ヒ押入レ」

△好忠集「中ハ[illegible]ニ住ヒテ雨ノ漏リ来ルトテ」「雨漏リ来ル中ニ住ヒテ」

蜘蛛ノ巣ガキ中」宇治拾遺「主ハ中ヲ見ル」

雑秋「秋ハ吹キ破リ我ガ宿ノあばら屋ニ」

あばらや（名）荒屋（アバラヤ）（荒廃シタル家）荒キ家、人ノ休息ニ仮ニ設ケタルモノ、粗ニシテ、アバラ、天治字鏡十二ノ三十三「客亭、旅館之屋也、客人屋、阿波良」

天ツ乙女、新撰万葉集十ノ十二「真、[illegible]、人所住準也、阿波良、阿波良也」

あばる（自下二）荒廃（ハイ）ル、ハレ（貴ニ）荒シ敗ル、毀レ、毀レノコトナル、名義抄「圮、アバル、ガル、クズル、ヒル、空穂、忠実下ノ巻「ゴミウラヤキ人ト云ヘド あばれたる所ニカスカナル 住ミナド ミ」

源氏物語三ノ十五「柴垣ノハツカニあばれ残レルガ雨ダニタマルさびクアレハタルナド」

あ・はれ（感）天晴（嘆）

廣く心に感ずる聲なり、アヽ、アヤ、アラ、嘆

古語拾遺、日神、天岩屋戸ヲ出テラヲ時諸神「伊手歌舞相共猛曰阿波礼乎

オモシロ、アナ樂シ」景行紀。。。「日本武尊御歌「一ツ松、阿波例、人ニアリケバ」

（十九年。。。。二十年十月）

著セマシヲ」（松ヨ賞ヒタマヒシヲリ）武烈紀。。。「泣キ米チ行ケ影媛阿婆例」

（即位前三年）

万葉ノ二十三「カキキラシ雨降ル夜ヲホトヽギス鳴キテ行クナリ阿怜ノ島」靈異記

下巻「嘆アハシ」器ニテハ上ニ、催馬楽、我駒「イデ我ガ駒、早ク行キネ」△

あはれ（哀）（感哀ノ事ヲ哀ハル意ニ日ヒテ名付シ）

賞ム（ヤマト、傷レタルコト）「可賞」伊勢物語。。。「聲ヲカシヲ出サレニ歌ヒケル」源氏、桐壺

（面白キコト）

。。。「人ガラノあはれに情アリシ淑心ヲ」徒然草。。。「此國ノ博士タチノ書ヒタル

三三 あはれ、巻々多ヤリケル」

△哀、哀れ、哀れ（日葉屋ニ哀れ、哀れ、例）

あね（姉）、かぢ（妹）　姉妹、婦人ノ外出スルニ髮ニ路塵ノカヽルヲ防カムトテ手拭ヲ被ルニ手拭ノ中央ヲ前位ニ當テ左右ノ端ヲ後位ニ下ハシ其一端ヲ

（物見遊山ナド）

位ニ拔通シテ其角ヲ額ノ所ニ掛ル

あはせ、ぎぬ（袷）　裏ヲ付タル衣

あはせ、しやうゆ　合醤油　醤油、煮出シニ醤油ヲ入レタルモノ、えびうナド淺ケテ食フ

あはず　合醋　醋二杯、味醂一杯、醤油半杯ヲ合ハセタルモノ、煮物ニ注ギテ用ヒル

あはせ、びん　合髮　男ノ髮、髮屋、名、左右ノ髮、毛ヲ髻ノ下ニ合ハセテ髻ヲ太元結ニテ五

（髮ヲ結ブ紐ヲ用ヒル）

（髮ヲ結ブ紐ヲ用ヒル）

（髮ヲ結ブ紐ヲ用ヒル）

字典 淺 浅

あさつ 他四 淺 稀薄ノ意ナス 字類抄 淺アハシ 實アハツ 薄薄

あさたす 他四 淺 淺ノ部 淺ト同語 他動トシテ

鉢火葉祝詞「吾ヲ見タフナト申シタマヒテ」

文選 贈答幸「淺其淳朴哉」

あさ

あはつかる 自四 あは、淡、つかは副詞ノ後尾、ふと、かもアリ

アハアハシク、アハツケク、心ヲ田ボ

源 輕淳 源 晨木、土「何事ゾト あはつかな サシ仰ギ ロロヲ

ムイカ、口惜シカラメ」

あはつけし 形一 あはつかヲ形容詞ニシタル後、むくつけしをむくつけかり

アハツカナリ、アハアハシ、ウハツキタリ、輕淳 源 胡蝶 ユクリカニ あはつけき事ナオボシ知ラレバ

四字裏「あはつけき 聲狀ニ直セバ ツケガ 詞ニテ」

祝詞考 下ノセラ

あの 阿野 穴生ノ名 近江國穴生ノ名エ用ヒシ 紀ノ あるふ(さ)ノ條ノ見ヨ」

大極ノ名

あのさと 副 如実 事ノ如ク思フトエリ 源 蜻蛉「コトカリシコトヲ、能カスオホ」

ゲニ あのさと 淋心ニ 淋シケリ」

あのよ 彼世 前世 後世 狂言 せしし 狩「コナタヲ且那ポント 頼ム

カラハ 此ノ世あの世マデ 頼ミマスルゾ」 黄泉

あは、あはし 形二 淡淡 (一) 基ヲ淡シ 基ヲ薄シ 天治字鏡 十二ニ十六「薄淡、阿波波

志」(あはあはノ約) (三) カルガルシ、ウハツキタリ、輕薄 源ヲ霧、五十七「アラシテ物

ミヲヒケムモ、あなあはしうじナキ事トオホシナガラ」 風東屋 五十「人モあなあはし

手思トシ言ハムガヤスカラヌナリ」 紫日記上「色メカシキヲバイトあはあはしト

オボシメシタレバ」 (三) オチツカズ 狭衣 三ノ上「イトカラ、あはあはしく忘ゼラ出給

ヘリシ」

[illegible]

[illegible]阿房（淡坊ノ約、擬人[illegible]）あは[illegible]はしき又のあなむら[illegible]

[illegible]阿房（猥坊ノ約、擬人[illegible]）あわてもの、ちんぱう同類[illegible]

（元年あわてんぼう）

（ばう）續松の葉に恥を知

[illegible]

（[illegible]）

あはうこと形一 阿房臭（アホラシ、バカクサシ、）

あはうみ 淡海（マミツ 淡水ノ海、ミツウミ 約メテ あふみ、「近ツあふみ」遠ツあふみ）

（潮海ニ對ス）

（遠江）

（[illegible]）新竹齋物語、一醫者ノ「[illegible]」

（自言）靜岡ハ[illegible]アバ[illegible]

あはめし 粟飯（粟ヲ炊キタル飯、[illegible]）

（アハイヒ）

あはうこと形一 阿房臭（アホラシ、バカクサシ、）

あはうみ 淡海（マミツ 淡水ノ海、ミツウミ 約メテ あふみ、「近ツあふみ」遠ツあふみ）

（遠江）

（遠江）

森むつや製

大平記ノ百首ナド

下巻集、拾遺集、後撰集ノ中ニ用ナド

あはう 阿房（あわ坊ノ約、猥坊ノ擬人[illegible]）元来あわう者ニ

[illegible]あばうなどゝ續松の葉に恥を知る、あはう坊ナドアリあわてもの、と

ちんぱうナドト同類ニ使フ。阿房宮ヲ造營シタル附會極マリ」

ヨエ、ウツケ、シレモノ、オロカモノ、バカ、（靜岡縣、アッパア）痴呆 鈍漢

狂言記、不聞座頭、臆病者ノ「阿房」新竹齋物語、一醫者「ク

クヌヌ理屈あわうロ」引ズリ羽織、出頭中」

あはうらし 形二 阿房ウツケタル、アホラシ、バカラシ、アホウクサシ、 痴呆

オホウラセツ 阿防畢利（梵語）佛說、地獄ノ牛頭馬頭猛卒。

あはーから 粟軒 粟莖 神代紀上ノ四五「粟莖」生雞ニ十一「秤稈、禾莖、阿波

加良」

序 義任潤

あはく 自四 喘 あへぐ 息ヒ 刻ヒ ヒタ 呼吸ス、天治字鏡ニ十五「喘、馬勞也、阿波久」同、二ノ十三「喘、氣急也、阿波文」名義抄「喘、アヘグ（イキツク）」

（十四「雜集日向小戸橘之檍原」ハ）

あはき 檍 「青葉木ノ翠ナルヲ」 檍 乗ナリトモ 神代紀上ノ十七「檍此云阿波岐原」

ぜ ぜ 杜子ノ子ハ、檍、阿波木、檍木一名也見爾雅注」

あはぐから 「抗達奥」 「二葉 幹ノ長ミモアルカ」 奥ノ名 火箭 此箭ハ、ベレトモ云 和名抄

十九ノ二「抗達奥、阿波秋良」

あばく クルクル 自下二 荒廢 荒廢 スサブ、クブル、

霊異記中ノ第十七「観音銅像」「岡本尼寺観音銅像云ヒ塗金 彼世法」

訓釋「続、阿波計」 仙窟、荒廢 荒廢 盍衰 元 四十二 「カカル大屋ナレバ、ヨモ

渡 ワタル 船ヲ連ハシナンド思ヒテ打解ケあはケタラム所ヘスルリト漕リテコソ敵ヲ

八誅スル

あはつゆ 二葉 草ノ葉、極メテ小サキモノニ譬ヒテモ云フ、

あはれ 感 感ノ辞 感ヒ

あはねはた 他四 遍 遍クス、諸葉ニ キワタル サワニス、名義抄 雑 「雑、アバヨハス」

あはび 蛇 蛇ヒ ヒ

あはせ

あはぬ 粟野 粟田ノアル野辺 皇極代三年冬 「彼方ノ阿波努ノ雑」 万七ノ一二〇〇「阿波ノ野ノ花橘」

あ 淡雪 春ノ消エヤスキ雪 古事記 淡雪 「阿波由岐」

あはむ 他下二 ヒ 沈

コノ例 あは○ 大和國添上郡 ナ第弟 編

ト云フ 神代紀上ノ十七「根此云阿ゴ

見南部注」

火菌ヤガ蔭ハベレト云 和名抄

ハ、クヅル、

観音銅像ニ金泥金箔 後世法」

「カカル大屋ナレバ、ヨモ

第一條

ケタル 所ヘスルリト優リテコソ敵ヲ

10 森むらや製

ヲ例 あはぬ ニアラズ、あばぬ

大和國添上郡ナリト萬葉古義ニ見エ

第弟 伊 集

淡ト同ジ意アリ　古無流

あはつ　淡四流（淡ヲ活用ス（淡むト同趣）連用　敬語ニあはだすト云フ　説文「淡薄ト」

淡ノ字、アハアハシ　淡ノ字　字彙ニ「淡、アハツ　淡薄」　霧ガハツ」

あはむ　代トニ（淡ヲ活用ス　あはム（淡）モアリ」　濁ル

淡シトス、カロシ　疎ム　疎ム　あはむト濁ル　躊躇、躊躇外　天武紀下○○「下諫上暴」

淡、昂水三十「八種キニテ言公方ナシト武部ヲあはめ憎ミテ少シ宜

シカラムコトヲ申セト責メタマヘド　同昂木下ノ四十「ここあはめラレ」

同、夕雫七十四「イミジウあはめウラミ申シタマヘバ」

あはめし　粟飯　アハイヒ、粟ノ飯

あば（感）　ハさらなよ（感）　ハ濁ノ相別ルトスル時相告グル詞、サヨナラ

あはよく（副）（好）　好ノ字ナルベシ」　掠好クアラバ、首クニガ、「あはよく太取

テ代ラムト云ヒ」

（平家十ノ第三條「軍ニあはム惡ニたに引カハ　ノ誤ノ如シ」）

あひ　相（相手ノ字）　代、酒ヲ飲ミ居ル間ニ盃ヲ受ケテ後ニ差ス「色ノあひヨ」

あひ（名）　掠撃（相撃、あひ打ち　大槌ヲ掛ケあひ打ち）　今ノ大槌

和名抄十五、器作具「掠撃（阿比）」　名義抄、木部、撃、掠　アヒウチ」　掠撃アヒ

あひ、ならず（副）　不相変　変ハルコトナク、障ルナク、イツシテモ、

あひ、かね（副）　相撞　此度注意シテ、又又ス、「相撞ト神ノ神申一作」

カヒ（方言）　（保元三第三條「相撞（ヲ）」　相撞ヲ「ぶつかる」ト云ヒ　ヒメズトテ」

あひ、ぎさ（名）　相間ヲ文字ニ書キシタルナリ　其條ヲ見ヨ

あひ、ぐち　合葉　人ノ相愛ル体ニ通ジテ利目アル葉

あひ、くち（名）　合口　話ノ心ノ相合フ　合意ノ話　膝ト膝ダチノ事ナド云フ

あひ、じやく　相酌　人ト酒ヲ飲合フニ給仕ナドヲ互ニ面ヲ為合フ

あひしゃり　相決　二ツノ引アノカマケド相合フトコロ、互ニ半分ツ一決リ取リテ喰合ハズ
　　扶ヲツグニ　スキマアラシメザル多　一方ヲ凸形ニ一方ヲ凹形ニサクルヲ
　　アヒカキ、　筍雖　　まじやり　トスフ

あひづり　〔相釣カ相連ノ誤ナル〕　互ニ宍鞠ヲ示シアトヨリ謀ルコトヲ　アヒビキ　近
　　来ノ芸チウナド云フ　詞モモヒリ　　阿蘭

あひざし　相輿　二人ニ輿相乗リ充テ、院本、椀久、松山、相輿ニ相乗リ
　　（相相ガ馬ニ乗ルニ同ジ）

あバせ　合せ　他ヲ　偶ヲ　敵ノ上ニノヒカラス、

あひたいぶき　相対不義　男女私ニ通ヒテ不義スルヲ　和奸

あひたちあう　間中　教訓状、浮世物語、浮世草子　名題　役者ノ体ヲ見ル

あひてむかひ　相手向　相手向ヒ差向ヒ、他人関ニスルコト、今、ヨモガヒト云フ俗ヒ
　　院本　仮名文章　中ノ　銀杏ノ形ガ理不盡ト言ヒテ、大人気ナイ、相手ム

かひミテオキヤ

あひてかた　相手方　江戸時代ニ訴訟ニ訴訟人（原告）ノ相手トナル者、今ノ被告

あひさ　忍間（あひだ　間ヲ　ぶさく（蓋）ノ例）　あひだ　同じ、アヒマ

あひびひ　相火　他ノ男女ニ同ジ火ニテ焼ケル、同火　へつび　別火ニ居ス
　　共用ノ火

あひ間日　前後ニ事アル女ノ日ノ日

あひびき　相引　二人ノ戦争ニ双方ヒニ引退ク　文綾

（三）双方ニ物ヲ引張リ合フコト、　唐船噺今国姓爺（享保近松作）中、足首
　　院本

掴ンデ兄弟ガ大ノ男ヲ相引シ

（三）鑓ノ胴ノ胴ノ間ノ板ニツケテアル竹ノ組、コレヲ相引ノ緒ト云ヒ　綿上ノ高紐ニ相引ノ
　　文

クルモノ（四）袴ノモモタチ（五）宍鞠、相撲キリ手ヲタクミテ、アヒツリナレアヒ、男女鞠
ニテ、合ハセテ蹴（全ルナリ）モモヒヒ、婿或、宍（六）芝居ノ衣装ナドニ糸ニテ縫ヒ止メアル

仕懸、コレヲ抜去レバ其者ノ腰ヲ引きぬきト云フ其体ヲ見ヨ

あひびろ、ばば　相撲場　縦横同じ廣サノ馬場、寿永元年有

旨ノ様ニ此村数一所定相廣ニ馬場又由緒御出ニ

あひま　間馬　将棋ニ敵駒ノ進ムヲ防ガメニ我ガ駒ト間ニ他駒ヲ置ク

あひまさ　間正（奉書紙ト正目紙ノ間ノモノニ意）紙ノ種、正目紙ヨリ稍厚キモノ

あひもち　相持　互ニ持合フコト、優劣勝負ナキ

あひいせ　相宅（相宅ノ義カト云フ）

婿ノ親ト嫁ノ親トノ間柄ヲ互ニ呼ブ語

和名抄、、、、

兄弟ノ家又ハ本家分家ノ間ヲモ云ムヤサト云フトゾ

あひづくり　相作（つくりみゝヒトしみイヒト）

刺身ニ鮪ノ肉ノ赤キト鯛ノ白キヲ作リ合セタモノ

アビラウンケン　阿毘羅吽欠（賛語）

大日如来ノ祈ル時ノ呪文

あひろ　聚（足廣）

敏達紀十年九月「鵠ノ来ル」

~~あひ　聚　あひろ~~

あひ、ちがひ（白）　不相成　禁制スル意ノ五ツ語

ワマル
ゾマス
サロル
サタス

あむさ　他四　浴　アブサ　（浴もの）（作ヲ他ニシカフル）
あぶさ　同じ　アビサ　月ますも（豊）同様（逆）
（より）あぶさ　同じ

あむムルム　自下二　浴
あぶさ　他下二　「有井口瑞井」則汲之洗太子「時云」
「銚子ニ湯井ノ七子等　禅師ノ掬橋ヨリ来ム狐ニ安生佐ム」
あむムルムレ　他下二　浴　アビル
あぶさ同じ　アビル
信濃ナル那須ノ温湯ヲモあむさ　人ヲバクム病ヤムベク」
（三）
沐　於水中
浴　霊異記上ノ第八「深浴加波河辺」
「沐　於水中」
「霊異記上ノ第八所云」

森むらや製

アブル
ヨブス
タブル
ワブル
ハブル
ハブル
ハ

あぶむけ（名）〔所向〕アブムケルアイケ、

あぶらーがめ　油瓶　煙油ヲ入ル、瓶、形ハ小（アブラサシ、アブラガメ）

あぶらーじみ　油染　布帛ナト油ニ染ミテ汚レタルコト

あぶらーじょうもん　油證文　児童ノ約束ニスルコト、約ヲ違ヘバ三ツノ證ニ髪ノ油ヲ指先ニツケ柱ト江戸御番ノ頃、士ハ柔弱ナリテ髪ニ伽羅ノ油ヲツケズ、髪ヒシコトアリシニ、続ト云フ（八十翁昔語）

あぶらーつぼ　油壺　髪ノ油ヲ入レオク小壺、雅真装束抄、二「あぶらつぼニ油緒ヲ入レテ云ヘ」

あぶらーの一（かた）　主油司　宮内省ノ被官、諸國油戸ノ油ヲ司ル

あぶらひき　刷毛　はぶくろひき

あぶらーや　「油屋」（たこ屋ノ一名）（油色ヨリ）

あぶらーや　油屋　油ヲ売ル商家、油ヲ行商スル者

あぶらやさん　（油ヲ行商スル者ノ装束ヲ云フ）小児ニ着スル白布ノ胸掛、

△「宮ヲ坊ノ情隣ガ意寓」

ナクアブク

杉色寺池
ニテ九八六五四三二一九

あぶるあぶる（副）（此語、俗語ニ、意義ヲ、稽ニ、記アレドモ、浮ズ、濁音ハ、説ガ、誤ル）

先ヅ、間ニ、エタルガ如シ」

伊勢物語ノ、段ニ、身ヲ、責ル人ニ、恋ヒタル歌「あぶるあぶる思ヒハスベシ　準ナク（有方ニス）貴キ身ニモ苦シカリケリ」（同「真名本」「隨手恩者」）細川道齋　伊勢物語闕疑抄ニ「天福ノ本（定家卿本）ニハ、あぶるあぶるト、聲ヲサヘリ云ヘ（濁點ヲ付ケリ）」新撰朗詠集、七夕、詩△

源少女ノ「古大將民部卿ノ、あぶるあぶる　土杯取リタ（ルヲ）アサマシウ、ヌルヲ、歩ブ」

同、胡蝶ノ「古大將ハ、あぶるあぶるト、ナヒザリエトヨ、村出デタマフベキニアラズ」

笹枕「ナヒ、ナヒ、河ノ、瀬出デタマフ、ベキニアラズ」（毋ノ詞）

（三）ナヒ、ジテ、アフク、アヤフク、ヒトシド、蜻蛉日記、ノ、童ノ、賭ヲ、射ル所ニ、ジテ、敵ニ、

古兵法　源中將ナムアル、あぶるあぶる、射休セヲルメトテ、マコトノ、ゴ、嬉シウ、思ヒ、コト物ニ似ズ

あふみ　淡海（淡海ノ海、和名抄五、四「近江、知加津阿不三」）
淡ノ海　ミヅウミ　「近ツ淡海（近江）遠ツ淡海（遠江
万一〇〇の常陸国一〇〇の霞浦ノ〇〇」　アフミ

あふみ　さゞなみ　近江　近江国ニ製出セシ昔笠、昔ヨリ名高シ　謡曲
志がらき　竹ニ　ハ同国信楽ヨリ出デシモノカ、又ハ　ナラヒガハ
謡曲、巴「志がらき竹ニ　ヨキハノ里ニ渡シモ志ノダ」　人
東海道名所歌書（近）　堺町「老若男女、伊勢編笠近江さゞなミ着九
「　」　系竹秘集（寛文）小歌「コヤラ見ヘバ近江ガ見ユル、かさ買ウテヲモレあふみ
さゞなミ　ナンボウ着ヨコロん」　松の葉（元禄）小歌「さゞなミ　ニカテカメシヤレ、あ
ふみノかさ、形ハヨウテ着ヨウラサ」

表むらや製

あふみ　けろはい　近江　八景（八景ノ條ニ見ヨ）
近江國ノ湖辺西南ニ八處ノ景色、明治年中近江ノ政治公、瀟湘八景ニ擬シ
テ選定スト云フ（和漢名数）　比良暮雪、堅田落雁、辛崎夜雨、三井晩鐘、粟
津晴嵐、勢多夕照、矢橋帰帆、石山秋月ノ八ツ
あふひ（ヲ）　押柄（押柄ヲ音読ニ先ヲ上ル、人柄、身柄、柄ノ類）
（キヅカラ　ヒキ）
（ヲ）　氣ノ　キコト、オシツヨキコト、剛強　旧今昔二十八ノ二十三「三位中納言ハ、
思ヒ量リナク肝太クシテ押柄ニナムアリケル」（三）　ゴテ、高ブリカマルコト、オホフウ、
倨傲、尊大　甲陽軍鑑九ノ下、三十三「ナほハ、ハ、慮外ナ奉公人」　続意名抄（近
変）世話字盡「押柄者ヲ、（イキ）ヘイキ」　合類節用集〇〇「押柄者」

あふ、ふたこと　仮下ニ「齊」（前條ノ註ニ同ジ）取合ゼテ雑ノ（良物ヲ）

「塩ニあふ」「醋ニあへ」味噌（スク）胡麻ニ（ヲ）よぶ（ふる）トモヨフ「味噌あへ」胡麻あへ」

天治字鏡　十二ノ三十一「調和、塩阿不」齊、諸味、阿不留字」

和名抄十六ノ九、塩梅類「齊、安不、擣薑蒜、以醋和之」

字類抄「調和、ニヤハラフ」

あふ、ふたこと　自下ニ　敢（堪ふ、通だんカ）（ニ堪ヘコラフ）（カナフ）

御年不敢聞」「敢」「敢」

（ニ）二十二、天平寶字元年七月宣命「慶雲ネテ動リタマヘトモ敢末之時トシラ詞ヒ中レツクシ」

万十五ノ二十六「秋サレバ宜ク天ノ雲相ミ安信スレテ都ノ山ハ色ツキヌラム」（ニ）十九ノ三十「老イツク吾カ身

あへ（ふ）　齊　天平十年見ヨ　齊」安信ムカキ」源○○○○「人目ヲ憚リあふマジクナム」中横枕

あへ（ふ）　敢　万ノ三ノ（ニ）遂ゲ、果ス　敢ヘ（カヘ）ル　敢ヘ（カヘ）ル　サト決カケタラムトミ、人ヤ見あらぬまでまつ、アサマシキ・アキレテ」

名義抄、肯ヘス、ヘ（ヲ）敢ヘテ」

万十三ノ十五「我ノ待ル夜ノ数ミ　待（ム）敢（ヘ）モ」四十

「待ヒ安信ムカモ」

あへ（亘）「靈」「面」あふ（靈ヲ見ヨ）

あへ（亘）「敢」あふ（敢ヲ見ヨ）

あふぎ・ぐるし「扇流」（二）中古、山城國ノ大井川ニ貴人ノ逍遥ノ時金銀扇ヲ川ニ流シテ

興ヲ進ズルコトヤ（源平盛衰記）江戸ニ陽明ノ三殿流シ給ヒ

註風俗通記）宮殿ノ

あふぎ・おとし　扇落

あふぎ・ガミ　扇懸　上書畫ヲカキタル扇ヲ床ノ間ノ上ニ新ナドニ懸ヒタル物、細長キ板ニテ作リ

紫ノ組紐ナドツケテ風流ニ飾ル

あふ「阿附」オモネリツク（ヘツラフ）

あふじ「押子」草名、ヤキハン、

あふ　押　掛ケ字ノ異

森むらや製

あぶみ　他ニ「足鐙」乘馬ニテ両ノ鐙ニテ、馬ノ両脇ヲ挾ミ舟擧ス、多ヲ入ル、

字鏡ニ「策阿布留」（新撰字鏡下）「遲キ馬ニあしぶちナラデあぶれどそ心ノミコソ

先ダチニケレ」

あぶれもの　放者　アブレタルエノ、オチブレモノ

狩長四ノ中ノ四十三「今ハサカナルあぶれもの出デ来マドヘルナル世ニコソ」

あぶみつぼ　鐙壺　鐙ノ爪先ヲ入ル所

あぶら・きり　油炭　燈心ニ油ヲ浸シ火ヲツケテ一文錢ノ元ヨリ脇ヲ焼クト

あぶらのルル　自ヒニ「放浪」「澁」（俗ニあぶらる）特ニ主ガはぶいて（放浪）ト通ズ此字濁音

ナベシ他動ニあぶれさせ（ア）あぶさふ（ヒ）草葉等ニ安天佐波ストヤ（カ）おち

ぶる（零落）ニ　おちあぶる（内刊）　ハブルル、流離ス、オチブルル

（カヘスヘムコト）

同拾遺ニ「落ちあぶれ

源夢浮橋ニハ「イトカクマデサ迷ヒあぶる（ベキ）際トハ思ヒタマヘザリケヲ」同、東屋ニ「見

苦シキ世ニ、世ニあぶれムモ、知ラぬ顔ニテ聞カムコソ心苦シカルベケレ」

あへ（亘）「蹠」「面」あふ（蹠ヲ見ヨ）

あへ（亘）「敢」あふ（敢）ヲ見ヨ

あふぎ、ゑがし「扇流」（二）中古、山城國ノ大井川ニ貴人ノ逍遥ノ時金銀扇ヲ川ニ流シテ興ヲ催シ遊レシコト（雍州府志九）江戸ニテモ隅田川ノ三股ニ流シ者アリトカフ（洞房語園「便面記」）（三）模様ノ名、水ノ形ノ上ニ扇形ヲ散ラシテソノ一種ヲカキタルモノ

あふぎ、おとし　扇落　投扇興ニ同ジ、アフギナゲ

あふぎ、のが「扇賀」賀ノ條ヲ見ヨ

あふぎ、まち　扇襠、襠ノ形ノ模様ナルモノ

あふぎ、やとめ　扇屋染　延享ノ頃流行シタル津模様、方風ノ角、菱形、團扇形ナドヲ図シ其内ニ花鳥唐草ノ丸ヲ色々ニ染出シタルモノ多ク、俗称ニ子供用トシテ

森むらや製

あぶみ　他ニ「足鐙」乗馬ニテ両ノ鐙ニ、馬ノ両脇ヲ挟ミ舟擬ス多ヲ入ル、

字鏡ノ「策阿布留」影抵策下「懸キ馬ニあぶちナテあぶれどモ心ノミコソ先ダチニケレ」

あぶれもの　放者　アブレタルエノオチブレモノ　狩衣四ノ中ノ四十三「今ハサウナルあぶれもの出テ来マヒあれ世ニコソ」

あぶみつぼ　鐙壺　鐙ノ爪先ヲ入ル、ツボ

あぶらーきり　油炙　燈心ニ油ヲ浸シ火ヲツケテ一文銭ノ穴ヨリ脇ヲ焼クコト

あぶらーなル、ル　自ニ「放逸」「浪」（澁）ニ特ニ多カハ（俗ニあぶらる）はめて（放逸ト通ズ此字濁音ナベシ）他亜ニあぶれと云ヒ是ニテあぶさふト云ヒ草葉等ニ安天佐波ナトヤ

あぶら（雪花）おちあぶる（自刎）ハブルル、流離ヲオチブルル　同狩姫ノ「落ちあぶれ」（カスラヘムコト）

源氏夢浮橋ノ「イトカリニテ世ヲ千あぶら（雪花）ベキ際トハ思ヒタマヘザリケルヲ」同東屋ノ「見苦シキ世ニテ、世ニあぶれムモ、知ラぬ様ニテ聞カムコソ心苦シカルベケレ」

紅待

あべい 連体 あるべき、便宜、あべき音便、源、

あへい 幸ドモラツブツト仰セラルニ

あへき 連体 あるべき 男 榮花、初花、殿ヨリ清ケニ あべきカヤリ 徒ニ日ヲタル」

あへし しらふ 他、四 待遇 あへい合しらふ 其程ヲ見ヨ」(二) 程好ク取リアツカフ。モテナス、

アヒシラフ、(三) 受ケヨヘヲス、接拶ス、應答 應接 迷仙宣「應答」易林節用

(三) 取添ヘツケアハス、「松ニ石ヲ あへしらふ」剌身ニ山葵ヲ 紙墨

砂石集(弘安)七「妻、其人ヲあしらひアリシトキ、況貧ヨリ落チタリ」

あへ (ヲ男) 合ハ(下二段)ヲ上ヨ

あへたちばる 「楫」(変橘義改)人食物ニ雖ヘヲ其香佳ケレバ忘ルヲ唐詩「青果

雪落膳羹」(東雅) 柚る類 「方土ノ三ハ」吾妹子ニ逢ハズ久シク旨シ物、何信

橘ノ苦ムスマデニ」本草和名下三十二「橙似柚而小 阿倍多知波奈」（和名抄同ジ）

あへもの 醯（一）薑・蓼ヲ搗キテ醋ニテ齏（アヘモノ）ノ生鏡ヒ、「齏 阿乃毛乃」和名抄

十六十九「齏 阿倍毛乃 搗薑蓼以醋和之」（二）後ニ麦ヒシオトシテ胡麻又ハ味噌

ヲ擂リ溶カシテ魚菜ニ雑ヘタルモノ

あへる（動）齏ニ和ル

あへもの 乾魚 麦ひもの（イモノ）ノ俗ヲ見ヨ

あまびべ 海人部 海人ノ居ル部落（アマヒベ）、伊勢豊後風ナドニ海部郡アリ（海人部ヲ云フコトモアルナリ）アルナド其遺ヨリ 度部伯ノ「度海部」及山守部

8 尼ノ（四） 特ニテ俗ニ成人ノ女子ヲ罵リテ あまトモ云フ 雅語ナルモ少女ニ如ヒトモ云フ意

ヨリ（今横濱ナド開港場ニテ外国人ニ唐ハシレ居ル日本ノ子守女ヲ老少ヲ問ズあまト云

フ別ニ語原アルカ）

あま 阿母 ハハ、ヨシナオヤ 阿婆（阿（接頭）ノ俗ヲ見ヨ）

あまはゝ 母 母ヲ見ヨ 父母、尼ヲ叱リ

あまはらし（形） あまはゝらしノ約 尼ノ旅 徐生草ノ子ヲ見ヨ

アマーゴゼ 尼御前（ゴゼノ俗ヲ見ヨ） 尼ノ旅

アマーゴしよ 尼御所 皇女ノ尼トナリテ住ミタマヒシ寺

あまざけ ひき雨之墓 アマザケル

あまざけむし 雨之蟲 アマザケル 信友全集 八

アマーゼ 尼御前 雲其俗ヲ見ヨ

あまさ 甘 さとさ ノ俗ヲ見ヨ

あまぎ 天城 天城山 中ヨリ 陸奥ノ 上品ナルモノトス

あまぎ 天城山 伊豆国天城山中ヨリ陸奥ノ上品ナルモノトス

正家、主ノ筆ノ條、シモヤあまぎ我ガ身又ハ ヘ見シテ行ナハ ヒ

盛長 沈丁 ハ十二等ノ條 「

（ハ 居ノ沈ト申シ 女房五十 住ヒ居

御家ノ色ニ 尼御前ト 呼キ ヨビケルヲ 但シ 唯

あまぜ ノ俗ヲ見ヨ

あまぢ 何事ヲカ 意アリ

アマガベに「尼紅」着、児隠れ時請ケ居ル事ニ昔、尼アリ麺紅ツケテ隠
夫ヲ待チ乞ニ山賊ニ告ル者アリテ父母、尼ヲ叱リ懲ラシタ事ト舊筑波集（貞永）「親ニ
叱ラレ迷惑サスル」尼ガ横ニツケ見紅ヨカイヌゲヒ」嵐山集（慶安）「尼ガ紅ツケテ稲妻
待ツ夜カナ」（前條ノ天ガ紅ニカケタリ）中村瑞穂信明ノ書ヤ
長唄、安宅松「尼ガ紅ツケテ父ヤ母ニ言ハウヨ」
あまご 天児（人形ノ類カ（於母、阿母、乳母、乳母、人形、意ナル（し））
孺形（ジュケイ）
幼者ノ傍ニ置ク物、這児、類、物業ヲ具ハスセノミ（祓ノ人形ヲ作リトシテ後ノ製ナル尺
餅ノ竹筒ノ中ニ白粉ヲ首ヲ作リ又又又餅ノ筒ヲ其下ニ横ヲ三面肩トシ安人用ル
鶴、亀、松、竹、梅、盃ナド金銀ノ泊ニ名白ノ袖ヲ着ス源蒲実八「西ガヤ三歳
御仏カ来ヤ」

デ身ニ副ヘ持ル」河海抄「尼児ハ法ホウ名ナルモノ」仙源抄「諸茅ノ茅ヲ是」ニオホたんより三ヒロマデ用」江家次第「十七、立太子「阿末加津」比々奈」加茂保憲女集

「大海ニ捲キ撫デ流スあまがつバイクソノ人ノ淵ヲ見ルカ」

あまがつ（枕）天雪

あまりさへ　副　剰（アルガ餘リニ又添（テ）ル意）ソレニ、シカノミナラズ、オマケニ、畧シテ、アマサヘ、音便ニ、アマッサヘ、名義抄「剰、アマリサヘ」字類抄「剰、アマサヘ、アマッサヘ」迷仙

「剰」　餘ニ注ス　四ノ二「子三人智取リタレド今ニ我ニカリテコソハアリツレ」あまさへ　憂

耶ノガリヨ見セツル

あまさへ　剰　あまりさへ（餘ニ意ヲ）

あまさへ　剰　あまりさへノ餘ニ意ヲ

後撰、上、春下「あまりさへ」

餘

有り行ッベキ年ノミモハルニ必ズ逢フヨシモガナ」

あまし　形一　淡（アハシ）（淡シノ切、のたはく、のたらまく（宣）おはを、おまを（産）ノ例）「朕ガあまし」

（二）塩氣　淡シ（ウス）（三）鈍シ、鋭カラズ、「刀ノ切味あまし　鈍（ニブシ）（三）緩シ、オゾシカナ（ニブシ）

剰　ゴとあまし（意味ガ）」緩慢（四）寛シ（ニブシ）「釘ガあまし」楔ガあまし」

（五）愚ニ、怜利ナラズ、「遅鈍」

あまく見ル（侮ル）あまい男」

確トセズ

荘子。「徐則甘而不固」

あまさとあま　餘物

あまーだ甘酢　醋ハ甘ミヲツケタルモノ

あまだれ、ひさし　雨垂　柏子（雨垂ノ長クル汁ニカギリ三ツ）太子殿下四クミ一折チ、ニテ

後ニ二折チ又ニ折チ、ヒ、ヒ、ル

あまーつぶ　雨粒（アマダリ、アマツブ）名義抄「滴アマツビ」滴、アマツビ、シタル水ツミ

あまつ　雨粒（アマツブ）名義抄「滴アマツビ」滴、アマツビ、シタル水ツミ

アマーそぎ　尼剃　女ノ髪ヲ剃ル　婦人ノ剃髪ヲ頼信ノアタリニテ切ギ上ル髪ハ先

コレヲ垂尼トキモキ（尼ノ髪削ノ意）

アマーそぎ　尼削（垂尼ノ深削ノ意）　古ヘ少女ノ髪削シタル髪風、即チ切先ナリ、源、薄雲七「此春ヨリ生ス御髪、あまそぎノホドニテ ユラユラトメデタク」

秋草ま、ハノ二、うつしきも「尼こそぎタル児ノ目、髪ノオホヒタル」

榮花、衣珠、三十八「イミジクウツクシゲニ、あまそぎタル児どもノヤウニゾオハシマス」

あまーそぎ　天削　峯ノ高キコト、喜撰式「若詠高峰時　あまそぎトヒ」

八雲御抄ニハ「あまそぎ　峰ノ高キヲ云フ」

あまーつーまね　天狗　天狗ノ條ヲ見ヨ

あまーづけ　味淡　味ヲ甘ク淡ク調ル味淡ノ意

あまーつーしるし　天璽（天璽ノ條ヲ見ヨ）　代替ノ意

天聖光明ノ璽ヲ祥ヲ踏ミテ御歴代天津日嗣ヲ継キ知レメ御種ト云フ

あまーづつみ　雨障（障むノ條ヲ見ヨ）　雨ニ障リテ家ニコモリ居ルト、カガ[illegible]、雨ニ障リ

コメンアル、アマゴモリ　万四ノ十八「雨障常充君ハヒサカタノ昨夜ノ雨ニ懲リニケムカモ」ヒサカタ

ノ雨モ降ラネカ　雨下見君ニ数ヒテ此日暮ラサム」

あまーのーひつぎ　天日嗣　あまつひつぎノ條ヲ見ヨ

あまーつーみーおや　天津御祖　天皇ノ御遠祖、天照大神ヨリ稲草葉不合尊マデノ尊称（古事記遠）神武紀ノ「我天祖彦火瓊々杵尊」

あまづつみね 天狗（テングノ）

あまづけ 味漬 味ヲ甘ク漬ケタル漬物ナルベシ 内膳式「味漬」字ヒ物ノ味漬アヅケ」

あまづつるし 天津（アマツ）墨（ヒツ）〔日記〕 ~~天津墨標記~~ 「大鏡」 ~~草難~~

天照大神ノ璽々祥令ヲ賜ヒ御歴代、天津日嗣ヲ継キ知シメス御標識トシテ傳（ツタヘ）タマフ鏡

「剣ト曲玉トヲ中ス 後、三種神器ノ傳ヲ基ク 大殿祭祝詞「天津璽ノ剣鏡」

あまつたま 自四 天傳（アマツタヘ） 天ヲツタフ、ホシヲメグリエク、万十七ノ〇〇「ヒサカタノ天傳ヒ来ル雪霜ノ」

〔島傳ホシ三注〕 〔万ヲ三十「天傳オ人日サシキ」〕

あまつみそら 天三空 あまつそら、傳ヲ基ク 〔五ヲふつ日ヨ〕

あまつやしろ　天津社（天之社）

神代紀ノ一ノ「筆」天社国社之神　山幸神代ノ「定天地国社及神戸」

（二）真本天神国神　神代紀ノ一ノ「敬奉」天神地祇　地神曰祇、地祇各通ニ名ヲ

和名抄ニハ「天神曰神、加美、天地共高三位」

あまづらせん　甘葛煎（甘葛ノ蔓ヨリ汁ヲ取リテ砂糖ノ用トナサルモノ、文葉ヲ煎ジテ食物ニ和シテ甘味ヲツク、墨ニテアマツラ煎トモ云フ）

和名抄十六ノ十六、酥毫抄「千歳蘖汁、阿末都良、本朝式云甘葛煎」

大隠式「甘葛煎」

あまのうきはし　天浮橋（橋：階梯）

神代ニ天ト地トノ間ニヤリ名　階梯ヤリト云フ、天ノ橋立、アマハシ。

神代紀（四）、伊弉諾尊伊弉冉尊立於天浮橋（共ニ計曰云々）」釋紀「天浮橋者

天橋立是也」丹後風土記（釋紀所載、一）「與謝郡逢石里ノ海ニ長大ナル

石橋アリ長サ二千二百二十九丈アリ天橋立ト名ヅク伊射奈藝命、天ニ通ハム

トシテ作リタマフ、神ノ御梯ヲセル間ニ作レル仕ヘキトアリ、後紀十九、嘉祥三年三月

御子火、文屋ノ天能梯建、踏ミアユミ、天降リイマシ、大八洲」万十二ノ十九、天橋

モ長クモガモ高山モ高クモガモ」長歌「聖ノ

あまのはしだて　天橋立　あまのうきはしヲ見

あまはし　天橋　あめのうきはしヲ見

（舟橋ノ浮橋ハ異ナリ）

△(二)天安河ノ河原
万葉集ニ「天河原ニ八百萬千萬神ノ神集」
(三)銀河ノ河原

あまの・いはくらぶね　天磐櫂樟船　いはくらぶねニ乗リ

あまめ・はくら　天磐座　はくらニ坐リ

あまの・いはね　天磐船　はくらニ坐リ　△万三十八　ヒサカタノ安倉能乃川ヲ渡リ高千穂ノ峰ニ天降リシ磐ノ神ノ御代ヨリ云々

あまの・いはと　天岩屋戸　天岩屋ノ岩戸　神代紀上ノ(三十八)諸神立於天石窟戸之前　アマノイハト、アマイト　空穂　高天原ニ通ヲ岩屋　(出ル戸ヲタテモヲナム)△

あまの・いはや　天岩屋　高天原ニ通リシ岩屋　神代紀上ノ(三十八)日神、今ニ天石窟ニ閉磐戸而迷居焉

あまの・がはら　天河原　△天河原　万十ノ(三十三)天之河原ニ八百万ノ月ヲ立テ天姫ニ逢フ時ヨシ　待ツ」古今四　ヒサカタノ光ノ御宇ノ御代ヨリ　君ヲ思ヒ　横雲ノ立テリ

あまの・さくめ　「天探女」(ハヤブリ探リ邪思ヲ察ル意ヨリ云ル)　女神ノ名、心ネジケタリ云

神代紀下ニ「天探女ハ云ヲ阿那能石窟謎ニ曰ク、天探女者是神謎女也」是節家古説

「深セ心ヲ多那思ヒ也」(橘守部説ヨリ)(合巻考)

あまのと　天戸　あまのいはやどノ戸

森むらや製

△十五年法上ノ十七「天照大御神」「カミノミヤ」「天照ラス日女命」

あまてらす　自四　天照(ハテラスハ聖ノ敬語)(二)天照リシマス、空ニ耀キタマフ

万十八ノ(三十三)「安麻波良須神ノ御代ヨリ」神表紀ニ「天照ラシマス自然大神」

(三)天ノ下知ロシメス、三代実録ニ「天照ラシ御ス国ニシメス」

天照之治ノ国ニシメス　(十二月策命)「食国ヲ平ケク安

あまてらす　雨垂ル　槍先ニ釣リテ雨垂ヲ乳ケル花植

(天理ノ理想ナリ)

あまてらす　あまみかみ　天照大神(あまてらす伊勢ノ見ヲ)　大日孁貴ノ神ノ尊稱

又日神、天照大神、天照皇大神、天皇ノ皇祖ニマシマシ伊勢国太神宮ノ内宮ニ

祀ル　神代紀上ノハ二尊「生日神、月神、大日孁貴」書云、天照大神△

古語拾遺「天照大神者、皇祖神也、尊無比焉、自然清神者乃匿乃匿」

能敢抗」

あまの一ぬかて　天逆手（逆手ハ佛家ニテ榮手ヲ義
ナリト云）事ノ成就ヲ誓ニテ手ヲ拍ツコト約束ノ成ル時、賣買ハ成ル時手ノ形ノ変化ヲ見テ
時手ヲ拍ツコト其違ヒ古事記上ノ五十四、重代ニ神ノ御又大國主神ノ欲シ給フ此御
國ヲ皇孫命ニ奉ケ奉ルトテ「語其父大汝言、然之、此國者立奉天神之御子」即
踊板其船而天逆手矣於青柴垣打成而隱也」伊勢物語（九十六）段ニ會ヒ約
束シ女ノ伺ヲタヅネテ去ルニ「カノ男あまのさかてを拍テナム詛ヒ居ル」（中略）
（詛ノ成ルヲ期スルナリ）
あまの　天野　天野風ノ異ニ其俳ニ
あまのだら　天野梅　天野梅（俳ヲ集ム）

あまの一ぬかて　天八十蔭　あまのみ竹ニ
あまの一あかる　柴胡　はま　ぬかる
あまの一やす　天安河（やす　弥淑　義ヲ云）高天原ニアル川名
神代紀上ノ十二「天安河」古語拾遺「天八湍河」
あまの一むらくもの一つるぎ　天叢雲劍（燒刃ノ斑文ノ雲ノ如キ意トスル上有生氣
ト云ハ誤リナリ）神代ニ素戔嗚尊ノ八岐大蛇ヲ斬リ給ヒ其尾ヨリ得タマシ劍ノ
名、又都牟刈大刀、後ニ草薙劍ト改稱セラレテ三種ノ一ト稱ヘラル　神器
神代紀上ノ三十六「草薙劍本名天叢雲劍、蓋大蛇所居之上常有
雲故名焉」異行紀（四十二）「叢雲、此云武羅玖毛」
あまの一ばくら　天鼠座　ばくら　蝙蝠

あまの・はね　天鳥船　はね（後ノ條ノ項）

アマンドル　巴旦杏ニ同ジ

あま・ぶね　海舟　海上ヲ漕キユク舟　万十ノ三十七「海舟ノ楫取ノ酒ヲ」
万十七ノ[illegible]三十七　阿雅夫祢ニ真楫櫂イメナ」

あうた　筏興ノ音便、あだ子等　傳北ト

あみ・ぶね　網打舟　網打ニ用ヰル舟、アミブネ、

あみ・ぶね　網舟　アミウケブネ、

あみ・がさ　編笠（一）菅又ハ蘭ナドヲ編ミテ作ル被ヶ立、新撰六帖五「丈夫ガ菅ノ
あみ笠打チ重ヒテ目ヲモアハセズ人ノヤリユク」盛衰記十九「腰ヤ編笠ヲ着ル」
（第七條）
太平記十三「破レタル草鞋ニ編笠ヲ着テ」（人ノ目ヲ隠スニ用ヰタルガ如シ）
相模太郎殺行ニ
（三）後ニ専ラ藺ヲ粗ク編ミ作ルモノヲ云フ、我衣、黄ノ下駄ノ裏かさハ頂尖リテ三角
ナ持ツ時ハ傾ヲ取ル」實文延宴ノ頃ハ婦女ノ外出ニハ必ズ用ヰタリ　頭隠ス
カブメナリ後ノ製ナルハ形圓ク扁キヲ二ツニ折レルガ如シ作リ方ノ前後ニ紐ヲ輪ニシテ結ビ人目ヲ
隠シ創面ヲ見ズ蛞如シ
又（勢）
此笠ハ無蓋笠ト唐傘笠、深傘笠、目塞ヲ云ヒ、無蓋笠ハ所トヂナド種類アリ

拾遺集に出ず

あみがさ・ござや　傘笠茶屋（身分ヒクキ者ハ廟ニ入ルニハ傘ヲ脱ヒテ鞋ヲ脱ヒキ）

江戸甘茶屋道ノ廟門外ノ引手茶屋ニテ貸傘ヲ業トセシモ　元文ノ頃ニ止ム

恋ノ手紙ニ書ネバナラヌ時ニ　其紙ノ日付ニ撰印ヲ押シキ

あみ・ぶね　網船（二）引網ニ用ル舟　謡曲「蟻通」「御津ノ浦ニ網ヲトル網船」

（三）網打舟

あみ・もの　編物　絲ニテ編マメ物ヲ作ルコト、レエス、

あやめ　水鳥ノ名、若根國ニテ　あびとゝ云　沼ノ辺ニ棲ム、真鴨ノ大サニテ　嘴色黒

文アリ　ボトボトト飛ブ水ニ浮キカルクミトゝ云フモノ是レナルベシト云（伴信友大人ノ嘉祐

名寄五）拾遺ノ「水潜ル　あやめ羽ガヒノカヒモナク人ヲ雲居ノヨソニ見ル

カナ」　歌昭ノ拾遺集注

あま・ぶつ　自下二（甘）（甘ク活用スル語ヲナド同語）

（一）甘味ナリ、甘葛ノ香　源、宇津保　「イトあまクル菫物」

香ヲカヘズガヘス菫ノ居　（三）アマナフ、ウベナフ、甘受　源、若菜下ハ「兵部

卿ノ宮ナキ一所ノミオハシテ、世ノ中ヲスサマジク人笑ヘニオボサルニ、サラニミヤハあまテ過

スベキトオボシテ」　大鏡「吾殿ノ御キワザカナ　ミヤヘバ、イトゞ、今少シモ申サマホシキ

ナリト云ヘバ、侍モあまタリキ」　定家假名遣「アマヘテ、アマフル、甘ミキ、甘苦」

（三）恥ラフ　大鏡「道長下、萱殿梅壺侍　遺恨ノ事ヲモ、ルカナトあまテ　メオハシ」　榮花　浦々別

「イトハシタナク、ノ、シリケレバ、あまテ　逃ゲニケリ」

あま・ざけ　甘酒　甘キ香圓ギタリ、アマタル

源氏橋姫ノ巻　オホイノ琴ノ事　あまヘテ　弾キ中ヲレタリキト」

源竹川、昔ノ董　和琴ヲ弾カニヒル所ニ「あまテ　良ヒベキコトニモ　アラズヲ」思ヒテ

あまの エルエレ 自下ニ 和性 (甘ヲ活用ス(若ク曰ク)) 緩 (ノ別ハ) (幸カモ) 意ナルベシ

(一) 恩ニ別ルヽアイダル、ハ 源抜 (五十六) 「恩ニスツマゴキヲ特ニ(他ニ)あまかぜト云フ あまえテ待ルナルベシ」

(三) 児女ヨリ父母ノ恋ニ乗ジテ偽リテキマヽヲナス、アマエタル、ホダユ、 (撞婚) 「舘浦屋本節用 「驕」」

あまのじゃく 天邪鬼 両金剛ノ踏ミヘタル小悪鬼、

狂言池伊師「天のじゃくト申スハ御伊勢ニマヽヘシテ、ゴザル 彫屋サウヲ御伊勢テコザルカ」

あまのじゃば 蟲名 あまんじゃく ヲ見ヨ

あまのうと 天津祝詞 のうとヲ降ヲ見ヨ

あまばより 雨羽織 道服ヲ雨着ニシタルモノ、木綿合羽ノ如シ

因果物語(明暦ノ頃)「ソレガ直チニ雨羽織ヨリ」物数紙叶、四

「江戸ニテモ もんがらばと云フ 中国 雨羽織トキ あまばなりト云フ」

あまばた 簾 (編目ノ粗ク かたまた、かたみ(ヤ就)ナドアリ) 竹ヲ編ミ 巻ニル一連 簾ノ

我、生鈴ヶ谷ニ「簾 阿萬汰古」四字ニ「簾、阿萬汰古」

あまばしり 雨走 魔ノ目 (ヒ) 魔ノ横長キモノ △古事記上ノ巻 天神御子ノ御壽ハ木花ノ阿摩手比ノミマシナム」

あまひる (副) 如 (間 (ヒ) 如ク、 (たんさら かはらけ) 如ク、 神代紀下ノ巻「如盤石之常存」 (盤ナリ) 「先代旧事本紀」「如木華之開敷」△

あま・ミソ　甘味噌　塩気薄ク製シタル味噌

あまーも　大葉甘藻（海藻ノ一種）　ものがたりノ名

あまーもの　甘物　甘葛ノ汁、赤子ノ乳ノ足ラヌナドニ用ヰ（和訓栞）　若屋俗「スリ移」あまものニテ人間育テタルタメシ数多アリ」

あまーもーよーよ（副）　あめよよノ條ノ項

あまーのみかげ　天御蔭（天津日ノ影ノ霊ノ奥深ク蔭トナル）因ル稱ニテ日ノ御蔭トモ同じク八十蔭ト云フ八十隈ナドモ云フ数ニテ蔭ヲ言ヒ葉ヌキトモ云フ」

天皇ノ御殿舎、即チ大宮ノ異稱　天ノ八十蔭　大殿祭祝詞「皇御孫命ノ御殿ヲ云ヒ天之御翳日之御翳ト造リ仕ヘマツル瑞ノ御殿ヲ云ヒ」祈年祭祝詞「御舎仕ヘマツリテ天御蔭日御蔭ト隱リマセテ」推古紀三十年有「大君ノ隱リマ

（入）柳葉魚　河魚（八十蔭）

香ノ名

あげやーや　揚屋入　遊里ニテ上等遊女ノ揚屋ニ招カレ某家ニ行クコト、江戸移吉原ニテ寛保以後、牧逸先ヲ従ヘ盛装シテ前芸真ク俳メ高ク駒下駄ニテ歩ムコレヲ「中ト云フ」女歩行ノ仕形ニ八文字ヲ踏ムト云フコトアリ　寛政後ハ揚屋ヲ云フ絶エタルガ　引手茶屋入トナ

冨本洞房語園（寛保）「遊女ノ揚屋通ヒノ往来ヲどうちうト云フ云、八文字ヲ踏ム」

あまミソ　甘味噌　塩気薄ク製シタル味噌

あまいも　大葉甘藷（海藻ヲ）ヒガシノ名

あまもの　甘物　甘藷ノ湯、赤子ノ乳ノ足ラヌトキニ用ヰ（和州樹）若屋俗ス

リ移　あまもの　ミテ人間育テタルタメシ数多アリ」

あまもよ（副）　あめよよ　ノ條ノ項

あまのみかげ　天御蔭（天津日ノ影ヲ霞ヲ奥深ク蔭トナルニ因ル稱ミテ日ノ御蔭ト云フ

キ同じく八十蔭ト云フ八十隈ナドモ云フ数ミ蔭ヲ言ヒ葉ヌキト云フ」

（日ノ御蔭）

天皇ノ御殿舎、即チ大宮ノ異稱　天ノ八十蔭　大殿祭祝詞「皇御孫命ノ御

殿ヲ云ヒ天之御翳日之（ヒカゲ）御翳ト造リ仕ヘマツル瑞ノ御殿ヲ云ヒ」祈年祭祝詞

「御舎仕（マツリテ）天御蔭日御蔭ト隱リマレテ」推古紀三十年有「大君ノ隱リヤ

（ス）（阿波和）

（椰苏鮓）河礙（八十蔭）

アンベラ　阿波部良（蛮語ナリト云ヒ）麝香（香ノ名）

多該篇（桂苑）「南蛮蕃ノ成ル」谷俗者集（家照堂）「世有阿波部良者麝香鮓屎（名）（熟涎）和合

あんよ　歩行（あよび、沈）（二）小児ノ頃、歩ムヲ、アルクヲ、類推ス（寛永）「あんよ

トハシレモナイザナハ」　あんよ上チ」（三）始ヒテ足

あんりよ　安慮　安心ニ同じ

あんゐ　安慰　（心ノ安ンナグサルトコト

△ 字類地、餅
粉、アン、粉米
アン、見大膳式ニ

アン 餡（仏ノ宋音、福家ノ調理ニ「ヨリ名付ケタル」ノモノ、名ナリ）

（一）食物ノ名、赤小豆ヲ能ク煮テモル者ニ入レ堅ク搾リ去リ、塩ト砂糖ニ湯ヲ適宜ニ加ヘ圍メテ餡ヲ包ム、又餡ト、外部ニ薄ク、又ハ湯ニテ汁トシ、汁ニ皮ヲ作ル汁ヲ白あんト云フ、又白小豆ニテ作ルヲ白あんト云フ（二）金銀ノ細工物ナドニ紙ヲ以テ内部ニ銅ナトヲ貼メタルモノ、此ノ如ク作リタルヲ外部ノ金銀ニ乾キテハ、えんぎらト云フ（三）葛ノ異名

あんき 日安紀 朝ニ昼ク起キ出アルヒ、アサイ、アサキ、

あんさ 餡子（六ハ、ニ臣味ナク添フル詞、猫子、保子、如）

あんこ 兄子（女ニハ、ノ言便、男子同類ノ若者ノ稱

米麸類（調味ナドノ中ニ空ニヲ入レ、雑味

アンヂヤ 行脚 あんぎや 俳ヲ見ヨ

あんきよ 安居 心ヲ安カニ住ス居ルナリ

アンクワ 行火 (西京ニテハ火鉢ヲ焼火鉢ト云フ 其ヲ火ヲ火ト云フ誤ニ云ヘルナリ) 行火ハ禪家ノ音註ナリ (和訓栞)

あんどわ 安圉 身ヲ安カニ臥スコト、 足ヲ暖ムル用ヰル火爐 アンドブリ 脚爐

あんたん 暗澹 暗君 暗愚ナル君、

あんけう 鞍橋 クラボネ

あんざい 鮟鱇 あんかう (鮟鱇) ノ俳ヲ見ヨ、

あんざい 安居 結夏 俳ヲ見ヨ

アンさうもち 餡餅 (餡ノ上ニ鞠ノ上ニ乗ル) 餡ニ麦ヲ入ルナリ

俳ヲ見ヨ 洞房語園 (貞享) 醒睡賦 「先ヲ思ハバ、暗ニ情ニ傳ル」

あんさん 暗算 ムナサンヨウ、ムナザン

あんさいろん 闇齋點 訓點ノ俳ヲ見ヨ

あんしや 暗射 (先生ヒヘシ姑ノ後ニ従フ) 是ガ ヲ物事ヲ言ヒ中ルコト。

暗射ノ間ト云フ 暗ニ中テ地名ヲ記サル地図、地理ヲ学ブ者ニ言ヒ中テ心ニ用ヰル

あんしやうめい 安生命 俳諧ノ生死ノ事理ヲ悟リ心ノ境界ヲ決シテ天命ニ安ンス

天目禹峯禪師示衆語 主人公畢竟在甚麼 安心立命」

アンシヤベル (蘭語 Anjabel ノ訛ナリト云フ) 草名 オニダセキチク

あんじん 按針 (針盤ヲ按ヒテ船ノ方向ヲ定メル者) 水先業内者ナリ 船ニ乗

あんた (什) あなたノ音便

あんたい 安泰 ヤスカナルコト、 泰平

あんだら 阿呆 (アホ 馬鹿 雷 ノ音便カ)

三、オロカナルこと、バカ、アホウ、愚「ぐだらロ」ぐだら口」

アンダユ「安陀金」(梵語、下衣ト譯ス)二衣ノ條ヲ見ヨ

ぐだようスル(副)(味好ノ音便)京坂ノ方言、工合ヨク、ヨイアンバイニ「ぐだようスル」

アンづめ 鮑詰 鮑ノ條(三)ヲ見ヨ

ぐどぐどス 安堵孝行 鐘金宣旨墓(行ノ名、所領安堵ノ公券ヲ下付スルコトヲ(文安堵虎ノ巻ニ行燈ヲぐどぐどト注ス唐音歟)

アンドン 行燈(字、宋音、禪寺ヨリ起ル 行クニ携フル燈火、風ヲ防ムタメニ覆ヒトシタルモノ)

(二)油火ニ用ヰル具ニ製セルハ行クニ携フルニ方形ナル 框ニ紙ヲ貼リ井桁ノ内ノ

底板ニ燈盞ヲ置キ、上ニ手アリ提ケ行ク 今、茶家ニ露地ぐどぐどトシテ其製遠ヒ

韓維詩、元ノ「傳聲四上梵華、滿目燈行燈」下學集(文安)「行燈」正正御

提ノ何賞合「御使ノ寮ニ物忌レトクリ」ト云ヲ ぐどぐどト解ク「廣ニ物忌レスル 鈴ナリ」

鎌倉年中行事(年德寺)鎌ノ行市ノ行列ノ鐘ノ行燈ニ、行燈ニ、特クセベシ

松の葉(元禄)あくしよ八景「雨を降ラメニ高足駄、蓑着ル笠着テ棒ツイテ ぐどぐど

下ゲテドンガラリ」(三)後ニ専ラ空キト提ヲ用ヰル ヤウヨリ長方形ニ作リ角 ぐどぐどト云フ

車ヲ行ル即チ蹴手ヲ中ノ油ヲ蓄ヘ延喜ノ頃ヨリ丸ぐどぐど生キタリたそやぐど

ぐどぐどスルヤリ

方燈

あらた 竹便輿(編板(見傳))ノ音便約ヤリ假ヲヨタヘテあらたトモ云セリ あらた、

あふた共ニ あふたト濁音(行ぐ、あおぐ)ヨリ又あをたト通ハシタリ(尚文書便ヲぐどぐどたトモ云フ)

竹便輿ニ同ジ、あふた、あをた 又ぐどぐどたトモ云フ ぐどぐどたノ條ヲ見ヨ

室鳩集「蟹、アシタ」盛衰記十五ノ第七條「浄衣着タル死人ノ首モナ

キガあふたト毎ゼシテ如ルヲ見レバ」同ノ宇治合戦ノ条「青田絶エ、ー、ー

太平記十ノ(ノ)十三條「四郎入道ヲ竹輿ニ載セテ、伊ノ国ヲ出ル 惟ヲ上ニ引重ネ、源ノ奪ノ手

覆

[illegible]ヒテ、本國（カハルヲ）ヒテ、武藏（ムサシ）（ハ）[illegible]チタリケル」

あふた　筏輿　あうたの輿　俗

あんだ　竹筏輿（アミイタ）（編板ノ約轎ナリ）あうたの音便、あうたノ語源ヨリ見ヨ」

アミイタ、アウタ、アフタ、アヨタ　板ヲケヲ傍ニテ竹ヲ釣トシ九竹ヲ樂トシテ舁クモノ、罪人ヲ負

傳指、旅中ノ病令又ハ土石ヲ運ブニ用ヒタリ、釣臺山ノ義、ガ高ク就星ヨリ山ニ入ルヒノナベシ

土數坊、筏輿（アミイタ、アムダ）（異本）（雪秘物語）

「[illegible]ノ「俄ニ[illegible]ヒ[illegible]ヒ[illegible]ヒ

(四) 程合ニ[illegible]、安倍(五)[illegible]ト、病勢「あんぱ、
カワルイ」あんばいガヨイ」 「ウマイ丸ばいニ並ベテ」 (熟グアイ、様子 病ノ)

アンバン 餡麺麦 麺麦ノ中ニ餡ヲ包ミタルモノ、

アンビン 餡餅 (餡ノ宋音、餅者餅ニ同ジ、訛リテナンビン、南蛮餅)

ミヤハ大福餅ヲアンビンモチトモ云フ

あんぶ 鞍部 (鞍 前輪後輪、鞍ノ形ニ似タル意 (シブ) 翻譯注ナシ)

山ノ峯ドホリノ低クヘコンタトコロ、タヨリ、クヌ、クワ、

あんぺい 暗褐色 (黄色ノ黒ミヲオビタルモノ)

あんぺい 安平(二) ヤスクタヒラカナル事、平穏安穏

天武代九年月 安平 (ヤスヒラ 多ヒラ) 得安平 (ヒラ)

(三) タヤスキ、容易 正家物語五、文貴荒行ニ炎天ニ数ノ中ニ七日臥コヲ「修行ト云フハ是ニホドノ大事カト人ニ問ヘバソレホドナラムニハ、イカデカ命生ズベキト云フ間、サラバ安平ゴザンナレトヤカテ修行ニ出デニケル」白河文書、興国中奥州、官軍白川ノ結城親朝ヘ状、其ノ勢異伊達勢成二年修者府中蒙沿安平幸侯哉」(奥州風土ノ討平名ヨリ云ヒシナリ)

あんぽう (行便 法師 (輩) 墨カ云フ (嬉ガ義隆、二) 験人ニ名ヲ付ケリ 影法師 (影法師 一人法師ナドアリ)

義外ノ名、山岳嶮ヲ稍修飾シタルモノ、左右ニ風雪表、垂ヲカク、往時物持町人ナドノ家

用トセリ 寛文五年二月九日 町觸「町中ニテ就あんぽう者ハ之ヲ出ス候

前ヨリ御法度ニ候（婚姻条質、二）

京坂ニテ墨ニテ丸だら

丸だん　安本丹（阿房だら（あほだら紅ドヤリ）ノ音便）

ト云　阿房

是ニテ

（二）寛暦ノ頃ヨリノ流行俗語オロカモノ、バカ、ノ和訓梨。編「丸だん、

近世俗語あほうノ轉也」「風流志道軒伝」（平賀源内）序、医療ノ名目「阿房、安

雲津久、鄙羅坂、タハケ、安本丹ノ親玉」寝惚先生文集（蜀山人）「阿房、安

親玉

本丹輔」

（三）寛政ノ頃、かまぼこノ数ノ奥、ヲ取ヲ江戸中ニ流行コレヲ丸だんト云ヒ

慶ニ多シト云フ意ナリ　ト云ヒ又ハ笑覧ノ九ニ見ユ、

ちんめり（ヲ）　おもしろ集おめりノ條ヲ見ヨ

むらや製

（京ハ廣キ處ノ義）

あまのはら　天原　天ヲ廣大ナルニ就キテ言フ　万十九ノ十三「天原振リサケ見バ

照ル月モ満ケリ」為忠集「天の原連リワタル御雁」

（三）天ツ神ノ座シマス所、天ノ国　神代紀上ノ〇〇　必當我天原ニ記上〇〇「天原

自陽色

（万十五ノ〇、安麻能波良振リサケ見ル夜ノ月ケニケル）

天皇

（三）御殿、大宮　天御空、祈年祭祝詞「高天原ニ氷木高知リ」万二ノ

（宮中ニテ）

二十三、天智天皇御不豫ノ時、皇后ノ御歌「天原振リサケ見レバ御素ノ長ク天足

ラシタリ」上代ニハ屋ノ上ヨリ縄個ヲ長ク繋ク垂レテ家、国ヲトヒ　万十九ノ四十四、新

皆祭踏宴「天（大宮殿）（御殿）ニ五百津個ノ」推古紀二十年正月「大君ノ隠リ

マス天ノ八十蓋（御殿）出御ス」神武紀「空（御殿）ヲ見バ云ニ畏ミテ仕ヘマ

ツラム」

あめのした　天下（天下ノ文字ハ如何ナル意ヲ表ハシタリヤ）

天照大神ノ命ニヨリ、天孫ニ對シテ此國土ヲ科ス（授ケ給フ）ノ詞ニ「天下ノアメガシタ」

神代紀上ニハ　天照大神者可以治高天原、素戔嗚尊可以治天下

同上ノ八ニ「アメニタノキミ　天下之主」　同上ノ四十「經世ヒ天下」　継体紀ニハ「宇宙」

万五ノ〇〇「阿米能之多」

あめつち　天地（一）アメトツチト、天地。乾坤、世界（古事記上ノ「天地開闢之初」）神代紀下ノ十「寶祚之隆當與天地ノ長ノ久シキ」

天壌無窮者也」（三）天ツ神ト國ツ神ト、「万葉集」ニハ「天地ノ歎キ乞ヒ縋」

（古事記ニカヲキ入レズ、ニテ　あめ（ち）ノ東カレ」　（三）同ニ十ノ五十六「天地ノ国メシ國ゾ」　日本紀ハ

あめがち　雨勝　晴ハ、日ヨリモ雨降ルヨノ多キヲ　秋草ヨ、立、「朝日ヨリ雨がち

ニテ星ヲリタテス」

あめたき　飯煮　鱸ナド煮ルニ水飯ヲ加フルモノ

森むらや製

△万二ノ二十八、「ヒカタノ彩見ル如ク仰ギ見シ皇子ノ御門ノ」

あめ　天（一）人ノ頭上ニ仰ギ見レバ大地ノ覆ヒテ大倉ヲトリ廣大無辺ニ星日月

星辰ノカヽレルトコロ、アマ、オホゾラ、天ノ上空　△万十八ノ三十二「安米ノ下」

（二）天ツ神ノ座ヲスルトコロ、天ツ國、アマノハラ、タカマノハラ、古事記上ノ二十四「八百

萬ノ神共ニ天安河原ニ神集集而」

（三）皇　天ノ朝廷　（天ノ朝ニ就キテ物事ヲ敬ミテ言フ）

（四）御殿（おほまはらゝ長ゝ）　万十九ノ四十四、新嘗祭御宴、天（大嘗宮）ニ

五百達個ノ延フ」

あやぎぬ　綾錦　日　綾ニ織出シタル錦物

（二）綾ヲ織ルヲ業トセル者、（謡曲、呉服、ソレハ昔ノ君ガ代ニ唐國ヨリモ渡サシ）

あや織ニ二人ノ人ナルカ」（雄略紀十四年正月、呉國ノ献ズル所ノ才伎「漢織」）

（三）綾ヲ織ルナド手ヲ玉ニ取リ又ハ竹筒ナド折キサヘシ〳〵其端ヲ握リテトル

（四）番組（延喜式）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（九十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百二十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百三十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百四十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百五十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百六十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百七十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百八十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（百九十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百二十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百三十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百四十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百五十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百六十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百七十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百八十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（二百九十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百二十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（三百三十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百二十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百三十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（四百四十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百二十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百三十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（五百四十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百二十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百三十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（六百四十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百二十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百三十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（七百四十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百二十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百三十九）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十一）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十二）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十三）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十四）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十五）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十六）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十七）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十八）「小太刀ヲ拔ク者代ヲ早

（八百四十九）「小太刀ヲ

玉葉ニ、元、二
「あまもよふ、フリハヘ訪ム人モナシ無キニ劣リテ生ケル泉ノ長キ」

雨そよふ、の約

あめもよふ（歌）〔よ、所ハ約ト見ル 海ノ重ナルヨリト云フヨリ云フ〕

雨ノ降ルニ。雪モよふ、又肝ノ流ルヲ汗もよふトモ云フ〔同〕

和泉式部集、四「サ秋ノイトオモシロク咲キ乱ル所ニ雨ノ降ル日、客ノ来テ物語シテ帰ルニ「雨もよふイソグベシヤハ秋サ秋ノ花見ルトテハワザトモゾ来ル」大和物語、中「同じ女、後ニ兵衛尉モロタダニアヒテオコセタリケル、日ヲ吹キ雨降ル日「東屋ハ今日日暮ラシニ吹キ雨降ルメル」あめもよふ

△「夫木三十四ノ「賀茂ニ詣リタルニ雪ノイミジウ降リケルニ「禊シテナガメワビ侍ル雪もよふ神ノ心ヒキロギトクルウレシサ」海人手古良「汗もよふミダルル夏ノ涼シキハ君ニアフマノ屋ハヤシケリ」

あめのはばやみ　天羽羽弓

（屋羽張ノ大刀、同意ナルベシ）

太キ弓ナレ　此弓ニテ射ル矢ヲ羽々矢ト云ヒシナリ（まきたのの矢ヲまきやトいフれ）

蒼生記「天羽弓」古事記（四十九）「天之羽々矢」

五、天孫紀

（神武紀、元年十二月天之羽羽矢）

あめのはばや　天羽矢　あめのはばやみのたまヨ

あめまだら　黄牛斑　黄牛ニ斑アルモノ、

あめまだれ　同ジカルベシ

（名義抄、黄牛アメウシ、ヤマウシ）

あめり（ヨ）　あめり　ヒ　ヒ　ヒ

あめまだれ　黄牛篠　黄牛ニ斑点ノ如キ白斑アルモノ、星モ、大ナル白斑アルヲ出雲ノ国

斑ト云ヒ星モノ類ニ白斑一處アルヲ伯耆ト共ニ高貴ノ

御輦車ニ牽キ給フ牛ニ用ヒラル

あめのしたしろしめす　自四　御宇（御宇ノ條ヲ見ヨ）　天ノ下ヲ領知シ給フ、御治世ア

ラマシル

「泊瀬朝倉宮ニ御宇天皇」（雄略天皇）

森むつや製

空穂俊蔭「ゆの屋ニ御ア　あやきムコトノシタテケレバ」

「霊異記、序」「輕島豐明宮御宇誉田天皇之」（應神天皇）御宇佐女多比之宇、

阿米乃志多」仁德紀「於諸国立御宇天皇」常陸風土記「常陸國司解」

「難波長柄豐前大宮臨軒天皇」（孝德天皇）持統紀三年五月「於近江宮治天下天皇」（治御）

（天智天皇）

あやを　他四　零（零ノ他動、たやたやを（絶）ノ例）「零ユルヤウニ、コボス、ふタタテス、

空穂、梅花笠「代キレコリ血ヲサンあやしテ書キツケ」駿河ノ方、九第七條「今汗」

あやかす（上）　零（あや、あやを、あやかす、冷やひやを、ひやかす）

霊ヤ　ヒヒ、血ヲあやかす」　霊ヨナク

あやかす（動）　あやを　同ジカヤナス、　ラカス、

あやたけ（名）　綾竹　あやだケノ（三）ヲ見ヨ

あや　文摺　衣服・文ヲ摺リツケタモノ　夫木、三十三衣カリ衣ホヤノ山ヲ寄リ名ハ（テアケノユヒモ結ヒシテ）

あやう、ソラ　唖ノ僧　無学無智ノ僧　大方廣十輪經ニ罪ノ懺悔スルヲ知ラズ

愚ニ知無智ニシテ善知識・諮問セルヲ唖ノ僧トイヒ、ヒトアリ　本朝文粋ノ

斎世上人入唐時ノ願文ニ「我是日本國無才無行一羊僧也」（其ニ謙稱ナリ）

△霊異記序「羊僧異形所業未深天台智者之門術」△

あやむ　他下二　怪　怪シト思フ、アヤシム、イブカル、

隆信集一「……あやむバカリノ草枕ホトヽギスヤ人ノ聞ムラム」

平重衡ノ歌「さとにすむ海士の子なれば塩焼の煙ぞ目にもあやむる」

散木ハ「恋ストキ身ノケシキヲ変ハラズバ言ヒシニ人ノあやめマシヤハ」

あやむ　他下二　危　危ク大ニ懼ル、害ス、山家集、「千代経ベキ物ヲサナガラ（下祝）

あやめテヤ君ガ齢ノ杖ニ取ルベキ」人ヲあやむる

森むらや製

神代紀ニ漢人　拓殖紀ニ漢人ト書

漢　カン　一異ナ

あや　（名）漢　（綾ノ義　古漢土ヨリ通ジ織工女渡来ス）　始メテ

秦ヲ縮ヤリ呉ヲ朝鮮語ニテ綾ヲ呉ヲ（呉）あやはとり、あやはとり（倭）

（綾織）其織ノ勝レタル　（国名ニ）

「見ヨ」

應神天皇ノ御代ヨリ以後歴世帰化セル漢土ノ人ニ云フ語　其人ヲ漢人ト云ヘ

（音讀シテ漢ト云フ）

其部民ヲ漢部ト云ヒ其ヲ漢直ト云ヘ

應神紀三十年九月「後漢直祖阿知使主ニ率ヒ之党類十七縣而来帰」△△

雄略紀十八年十月「詔聚漢部定其伴造賜姓曰直」

△推古　（二）敏明紀十年十月「小野妹子ヲ隋国ニ遣ハシ隋国ニ遣ハシ隋ノ使ヲ伴ヒ来ル」

アル皆其子孫ナリ△

（天皇ノ御代ニ）

あやまり（副）奇（アヤしき事）ニ、是ト云フ、入リチガヒテ、極メガタク奇ニキニ云フ、

（一）奇レク、クスシク、奇代ニ、吉事ニ、下（雄略）ニ云ハ、采女ガ過チニ、「是レモ、阿良

尓瑕（カシ）ニ」市辺押磐皇子（ヲケノ）、支流（トモ）ニ、「事光日（ヒカリ）ノ御子」四十六ノ二「是ヲレモ安

夜尓貴ガラレニケク（恐ロシ）思ヒテ」ノノ祝詞「言ヤワクモ綾ニ畏キ」

（三）ロイタメナク、ムヒタウニ、ミダリニ、濫　後撰、十、恋、三「クレハトリあやる恋ヒシクアリカ

ベ二村山モ越エヌリニキ」　自モあやまり」

あやにく（副）生憎（ナマニク）（嗜憎（ナマニク）、轟、おなじ、おなじ（同）いまいや（吾）ノ例）

（三）アナニク、嗜憎、宝鏡十五「呵、慢、責、阿也尓久」名義抄「呵、アヤニク」

○○「惜シムヲ、惜シムヲ、身ガニモ、世ニアルモノヲ、アナあやにくノ後ノ心ヤ」（心ニ合ハズ、嫌

ニ思フ）（三）思フニガヒテ、意地ワロク。間ヨワロク。アイニク。源、桐壺、○○「御志あ

同若紫二十八「トトハ
にくナリンゾカシ」枕草子、四の巻「更に知る由もしこあやにくに強ヒクマヒレ」

あぬ[illegible]ぶみ　肖者　好キヨトニ解リ名者

証付ナ
根留清
四三ノ三九

あめのりざと　天記言（天ノ詔言ノ義、琴ガ大ゴト五ツ語源ヲ是レナリ）

神ノ託宣カシガカリ、神託、古事記上ノ三十六「天記琴」神降ル

時、和琴ヲ置キ琴敷ニ神倭根ノ命ヲ招キ、依縄ノ水ヲ宣キテ根ヲ

注ギ琴ヲ弾ケバ神ノ影向、根ノ水影ニ映リ琴ノ音ニツレテ託宣アリ

[illegible]

[illegible]

あやはとり 漢織（漢ノ織物）

應神天皇ノ御代ニ漢ヨリ来ル機織女 あやはとり 呉織

雄略紀 十四年正月「呉國使ヲ以テ呉所獻手末才伎漢織・呉織及ビ縫衣工女等ヲ泊瀬ニ住ハシム」

（三十七年）

東漢直ノ先祖

（三十七年）

（ヒルキ モトナ亟ヒルキ）

あゝ 阿諛 オモネリ（ヘツラフコト）「阿諛苟合ノ徒」

記侍十
根型淡黄
日三十二九
三

ああのりごと 天記言（天ノ詔記義、琴ヲ太ゴト云フ語原モ是レナリ）

神ノ託宣、カンガカリ、神託、古事記、上ノ三十六「天記琴」神降ル

時、和琴ヲ置キ琴頭ニ神依板ヲ立テ板ノ下ニ依瓶ノ水ヲ置キテ板ニ

注ギ琴ヲ弾ケバ神ノ影向、板ノ水影ニ映リ琴ノ音ニツレテ託宣アル

リト云フ 神功摂政前紀「九年（仲哀）三月皇后選吉日入齋宮」

親為神主則命武内宿禰令撫琴云云以千繒高繩置琴

頭尾而請曰 先日教天皇者誰神也願欲知其名云云乃答曰

云云」大神宮儀式帳、九月神嘗祭「第二御門ニ令侍ヲ御琴ヲ給テ

請天照座大神乃神教ヲ云云」

あめ、みゝ 天御子 天神ノ御子孫、アメミマ、スメミマ、天孫、

白主怪化ノ「ノノハ」「天孫」

あも　餡餅ノ雲（関西）

あもーしし　母父ノ東詞　乃至ハ「ノノ日」夜ハスグハユケトモ阿母恋ガ玉ノ緒恋シモ
（天化ヲ歌フレトキモ）　ナラモ

あーや　阿父郎（阿（接頭）ノ保ヲ長ク言フ）　母ヲ阿母トモ言フ　父ノ「阿郎」和名抄ニノ十六ノ阿郎
知ク」南史侯景伝「阿郎」

あも　元ニレ五　自十二　雲ニ（二）雫　落ツ、コボルル、

万八ノ三十「百枝サシ生ル橘玉ニ貫ク青ヲ近ミ安要ヌガミ（ナラヌ）花咲キニ
ケリ」同十八ノ三十八橘ノ歌「安要流宴ハ玉ニ貫キツ手ニ巻キテ」（橘ノ宴ハ手ニ巻
大豆ホドナル時多ク落ツルヲ緒ニ貫キテ秋ニカケルナリ）同十ノ五十四「秋ツ雨ハ草
花ノ安要ヌガミ（ナラヌガミ）思ヘト知ラズ多ク逢ハザレバ」（命消エヌバカリノ意ニ
カク）（三）滴リ落ツ流レ出ツ（他ニ「あせもとラ」）秋草ニ、ニ点ヲ打ツまあ、
「乳ハ元スナリメル乳母」同九、九十二段「イカデニ立出ラレント汗あえライミジキニ」ナラヌ
「イミジクノミニアト」
「血ハ血ハバカリ」「トト」
玄ヲ楽（能因）「いしなどりノ石ノ中宮ニ奉リケル人ニ代リテ「スメラキノ後ノ庚ノ石ソ
コレ思ヒ出アリあもマノ取」

あゆ（ニルエ）エ　自下二「肖」似ル、アヤカル、名義抄「似、アエタリ」内部「肖、アエタリ、ニタリ」

宮瓦坊「肖、アエ、アエタル、似也、像也」源波集「君ハヤ人ナミナミニ立デタチテ沈ミニ

沈ム我ニあゆナヨ」金葉集（十六雑下）　鮎「何ニあるラあゆトイフラム」

あゆ　東風　あゆのかせヲ見ヨ

あゆーのーかぜ　東風（ヒガシカゼ）ユチ、アエ、

万十七ノ四〇八　安由（乃可是）

「注」越後俗、東風、謂之安由乃可是也」同十九ノ三九七「安由ヲ凝ミ（奈呉）ノ浦

（ミ）ニ寄ル浪、殊手童（ナヨ）類ニ恋ヒヤモ」

あらか　「正殿」　みあらか、侍ヒ見ル

あ・ゆか　足結（あしゆひ、足）（一）上代ニ足ノ禅ヲ裏ケテソレヲ膝ノアタリニテ結ヒ固ム

紐カトエフ、鈴又ハ玉ナド付ケ

手結（チユヒ）（手纏）装飾トシタリトオボエ、アヨヒ、

古事記下（允恭）三十一「言人ノ阿由比ノ小鈴」雄略御歌前出「脚葉」歌ニ「阿遅

比」（左訓、アシユヒ）

三後ニ脛中（ハギ）稱トセルガ如シ萬葉集ニ多ク行旅ニ云ヘリ　皇極紀「大後ノ恐

廣瀬ノ渡ニムト阿唐比手作リ腰ツクラフモ」万十七四十三「若草ノ安由比手

作リ（岡脛中（ハギ）ヲ）ヲ七ハ「足結ヒ濡ラヌ此リノ瀬」同十ノ二「朝戸出ノ君ガ足

結ヒ濡ラス雨ニ有ラシモ」

あゆ　歩調（「あゆみ足」歩ムサマ、アシドリ　注ノ中ニ。「面モテ、あゆミ」ナド大体ト云ムニ足ヒタヤ（リ）」

あら 「稀」（殘ノ義）古言、ノコリノ意、穀ノ搗キノ皮ノ脱セザルモノ

~~あら 糠~~

~~あらが 洗草 あらかは 俳ノ見ル~~

~~あらがは 洗草 荒ブル神~~

あらがは 荒ブル神、狂言「花子」「宜山伏」「あら汁」「齋」「多ブガ雨」「宜伏」

あらひなは 洗草（アラカハ）（サキ草ヒ草ヒ草ヒ

あらぞめ 荒染 退紅 洗染ノ異名 紅染薄 今ハ薄ナルベシ 浅葉ト云フアリ

薄紅ニ染メタルコト。即チ桃色。退紅、退紅裏、衛士仕丁ノ服ナリ

天武紀、十二ノ二十九「退紅、洗曹女」（アラゾメ）

万十二ノ十四「桃衣褪ノ浅キノ衣、薄ク染ム」

江家次第、大臣家大饗「仕丁六著荒染」

あらなは 浅葉ノ異名 荒染 浅葉 異名、あらぞめ、浅葉ヲ見ヨ

退紅ニ染メタルなめし革（貞丈雑記、十）此革ニテ縅シタル鎧ヲあらなはどし

と云フ 平治物語一ノ第九條「家貞、流目結ノ直垂ニ浅葉ノ鎧着タリ」

あらひだて 洗立 人ノ所業ノ美麗ナドツラネテ言ヒ評クコト

あらき 殯 新槻義、殯、殯ノ訓文「殯、死在棺将遷葬柩寅」

（馬之）山朋御墓御アリテ尊殯ヲ奉リ葬サセズ暫ク御棺ニ收メ置キ奉ル

コトヲ殯。尊稲ニテ大御あらき、大あらきト云フ、万二ノ（二十三）「天皇大殯之時」

（其條ノ見出）

齊明紀、万三ノ（五十）「大皇ノ命恐ミ大荒城ノ時ニハアラネド雷隠リマス」

（長屋王歌）あらきヲ宜キ奉ル假宮ヲあらきノ宮ト云フ。もがりノ宮、喪

屋、殯ニテあらき。万二ノ（二十七）「日並知皇子尊殯宮」齊明紀、四年冬

建王、八歳薨、今城谷（大和）上、起殯而收」

あらき 新墾（新代ノ墾田（まりた（き（鍬）ノ例）新ニ代リ開キタル地、アラキダ

万七ノ八「齊種ニ時ノ荒木ノ小田ヲモトメト足往ク濱ヲ此ノ海ニ」

あらた 新田 新墾 條ノ見

あらきし 荒肝（荒ノ下ノ動詞ニセルナル）「荒肝ヲヒシグ」ヒヲヌグ」ヒヲ取ル

肝キモタマ（下ノ項ヲ見ヨ）

敵ノ勢強ク拉ク、甚ク怖ル、ドキモヌク

あらーらち　荒打　壁ノ荒塗（アラヌリ）（土蔵ノ壁ニヌル）

あらくる　自下二　荒（あらく（カ行下二段ノ語））　荒クアリ、荒井ル、

あらぶるし　粗砕　物ノ粉ヲ荒ンとゐ　荒ブ　粗ク砕ク（事）

あらしたい　荒仕子　貴（荒仕事ヲ為者ノ意ガ荒業子ノ略カ）

（二）農家ナドノ下賤ノ庭人、個奴　甲陽軍鑑、九ノ下「伊勢国ニテ夫、あらしたいマデモ（全ク）ロクスベク存ジ候」（三）人夫ノ兵卒、夫卒、甲陽軍鑑○○○

「信長勢ヲ敗軍シテ引先ニ　夜逃ゲニ仕リ引キコスレテ歩流死スルトイヘドモ信長家ノ前ニテ引ムリ」

あらしとし　荒仕事　力業

あらーしね　荒稲　粉米（キビマイ）　大日本史祝詞「春ル珍ノ御年、和稲荒稲」

（ちきゝ）

あらーしま　荒潮　流ノ烈シキ潮路　大祝詞「荒塩ノ塩ノ八百道」

あらーす　自四　荒（生ルヨリ、教語）　生レタマフ、元恭ノ「七年十二月　庵大泊漸天皇ニ之ク」

あらーすみ　荒山炭　堅炭（和炭ニ対シ堅実ナ炭、カタズミ、ミヲ常ニ炭ノコトナレバ、カタズミ、）　宇治拾遺「中ヲハ、炭、アラスミ」　宮銀ニ「筆、炭ノ類ヲ阿良須乃古」

あら　糠　あらぬか　字

あらし（ラ）　あるらしノ字　万三ノ二十六「貴ク有師ニ清ケク有師」万十五ノ二十「我ガ旅ノ久シク安良志ヨノ我ガ敷ル妹カ衣ノ塩ツ見ル」

アラタカノ　ぎく　いらたかの数珠ヲ見ル

あ家ら　荒（ら、附詞ニ、ラ変ニ、ラ変ニ）　荒野ト云フ意ニ　曠野

景行紀、「獲野、曠野、無津語之」　日本紀「和名抄、一ノ五「曠野、阿良野」　四年十月

（万六ノ十五「荒野等ニ里ハアレドモ大君ノ敷キマスト聞ハ」）

乃良

あらたまの（枕）荒玉（璞ノ石トカル（磨ク（キヤ）ナリ）ヲ五鏡（ヤタノカガミ）ノ鏡ノ例）ソヲ年ニ寄セテ（用ヒ）ナリト云フ天離ル日ナラヲ鄙ニ寄ル（ヒナ）ガ如ク」

年ト云フ多ノ枕詞移リテハ月ニモ用ヰ又年月ノ「来経」ニモ用ヰラル

一方ニノ立ニ「荒玉ノ年経ルマデニ」四十ノ「璞成ル」ハ果ニド」古事記（景行）ノ卒

三「阿良多麻能登斯ガ岐年（来経）ハ阿良多麻能都紀（月）ハ岐閇（来

経）行ク」万十ノ十八「璞之ナ戸（遠江ノ国）ガ竹垣」後ニ春ノ枕詞ニモ用

ヰラル（新年改マル意ニ解シ其ヲ知ラデ古

里ハ」

あらつぼし 形一（荒多レノ急ノ時）田 甚タ荒ミ、ラケナン 粗暴（ヒ精ニ出ル

あらつぼし（形）（粗多レノ急ノ時）甚タ粗ミ精シカラヌ 粗漏

あらひとがみ 現人神 （二）（アラヒト）（ヒトガミ）（居ル）（ヒトガミ）（ヒトガミ）（ヒトガミ

あらぶるフルブル　白上ニ　荒（散）（散ラ）ス

（二）遠ザカル・トホク・離散（離散）、万二ノ二十八「島ノ宮、曲リ、池ノ放チ島荒　池ノ上ナル

備ナ行キリ君座サストキ」

（三）愛想盡キテ懷カズナル　離情

万土ノ四十六「白潦涙、青リキ人ズ荒振妹ニ逢ヒツツ居ル」　荒ブスサバ

あらぶるフルブル　自上ニ　荒暴（荒ぶノ反）

荒ル　相ニ、アラフハ、暴ル　暴ル

古事記上ノ四十九「チハヤブル荒振風神」

古事記、中ノ（九）「言向平和荒大琉神等」

（十年十月）「海外荒俗騒夏」

暴強　續紀、延暦、年月、詔「陸奥國荒備流蝦夷等ヲ」

三ノ四九

源氏ノ何ノ巻ノ抄カ

田　鉄大祭祝詞「心惡子ノ心荒ビ留ハ云ヘ」ナドアル「備ビ」ハ、ぶノ音ニ用ヰタルナリ

上云フ（碩鼠漫筆三）

あらはゞし　荒法師　荒クキ法師、猛キ僧、マ男僧

吉野志信ニ「祈慶キトヨリコウ（又荒法師

あ

（二）

あらみさき　荒御鋒（荒御魂ニ同ジ）　神武紀前紀「荒魂為先鋒而導師」（吉野記）

船」盛衰記四十三ノ第二條「皇后異賊ヲ攻ム（キ皆天照大神ニ申サレ云ヘ二人ノ荒ミ

さきヲ表シ人タマヘリ」　狩衣ノ下「物ノ妨ゲノヒタテマルナメリ　あらみさきトモ云フモノ放

又人ハカクカルベキ事ハ惡シクナムオボエル」

（三）人ノ仲ヲ裂クヲ云フ　孟津抄「人ノ仲ヲ離ル神ヲハあらみさき又あらみ

ガケトモ云フ、荒ガケ」

△奇魂ハ奇ビヤ
ヒトシテ萬事ヲ
知リ給フ事ヲ
稚ス

あらみたま　荒御魂　神ノ御霊ノ現ハレテ、外ニ進ミ強勇ナルモノヲ斬伏セムト
シタマフモノ。コレニ反シテ内ニ和ミ居テ鎮マリマスヲ和御魂ト申ス。御魂ノ徳用ニ就
キテ言ヒワケルナリ　神功即位前紀、住吉ノ神ノ皇后ニ「和魂服玉身而寄
素命、荒魂為先鋒而導導ヒ」和魂此云ハ倭柔多摩、荒魂此云ハ
阿逗瑳多摩」橋ニ荒魂為軍先鋒、請和魂為主船鎮」又和魂ニ
其徳用ニ因リテ幸魂奇魂ノ稱アリ。幸魂ハ其身ヲ幸アラシメタマフ稱ニテ△
神代紀上ノ四十二「幸魂此云佐枳弥多摩」（私ニ左支久阿良之元留魂也」）
奇魂此云倶斯美霊」

あらもの　荒者　荒々シキ者、勇猛ナル人　荒者
平治物語ニ「若黒判官ノ三ノ太郎ハ荒者ニテ悪禅師ト云ヒケリ」

△安良礼　松葉
住吉ノ第少女
ト見レド飽カ
マカモ」

あらーやま　荒山　人ノ染ナキ山　万十三ノ「荒山モ人シヨスレバヨソルトゾ言フ」
万二三十一「泊瀬ノ山ハ真木立ツ荒山通ヲ」
万九ノ三十四「アシビキノ荒山中ニ送リオキテ、帰ラク見レバ心苦シモ」（第ヲ
荒リタル歌）

あらくさまつばら　疎松葉（粗々ノ約）疎ナル松林。又アラ「マツバラ」

神功紀元年「秋九月ノ阿羅々摩廬岐邑」万一ノ「アラレウツ」（二十六）

あらまき　新巻（粗ノ皆略キタル意カ）鮭ノ塩引ノ淡塩ニシタルモノ、上等ノモノトス

あらまき　塔婆（高ツタコト塔ノ如シ）田舎ノ貧民ノ類カトモ
続古事談五「條院ノ御時ニ、あらまき婆ト云フ婆ノ御覧ジケリ、
云ヒ女婆ノ初ノ人ノ姿ニテ、丈ニ及ビケリ」

あらーれうち　荒療治（一）外科醫ナドノスル手荒キ療治ノ仕方（二）人ヲ殺傷スルコト

あられ（霰）　あられはしり　霰降ル時ノ様子　其條ヲ見ヨ

あられーそば　霰蕎麦　かけそばニ霰ノ如ク見ユルカラ名ケタル。

あられ（ばしり）ヲ（あられ、ヲ）（敬語ノ助詞ト信ジツキタル）あらて人命令形、
（あられ）より古格ニハ助詞ヲモよって添ヘズ（万五ノ「大道知ラしめ」
ナド）御在世ヲ（ヲ）ヲれよト云ヘリ」

踊歌ノ名、昔シテあられトイヒキ云フ踊歌ノ歌舞ノ終リニ萬年阿良礼ト云
フコトヲ繰返シ歌ヒツヽ足早ニ去リテ退ガ故ニ名トス 釋紀十五、踊歌「今
俗曰阿良礼（アラレバリ）」此歌曲之終、必重稱萬年阿良礼、今改曰萬歳楽」
是古語之遺也」 持統紀、七年三月、壬辰、是日浅人等麦踊（ムギヲドリ）歌

あり（系）「有」 アルコト、存在スルコト、世ニ在ルコト、一方五ノ「ヒカタギヌ布肩衣、安里ノコトゴコト着」
（現 ?）（二十九）
ソヘドモ」 ありノマカヒ」 ありノスサビ」（各條ヲ見ヨ）「ありト無シト」
あり（感） 蹴鞠ノ時、鞠ヲ蹴上ゲテ落サヌ時、背スル聲、アリアリ。 拾遺秘抄、
蹴鞠ノ大撰ニ蹴ムトモフ、鞠ヲ云フニ、あらくれ、又、あり、ありトモフトアリ
吾吟集（慶安）三、菓ノ蹴アリ（アリ）鞠ノ如クニフラフキテ 殿ノ精・ありヤアリヤミ（聽）
ありとて、あり（連体）「所有」 アルカキリノ。アニヒル。 孝謙紀ニ「國家所有公民」 竹取「我
ガ家ニ有ルト有ル人ヨリ宮仕メテ」 大化元年七月
あり・あはす 自下二「有合」 有合フヤウニセヤス（モチアハス）「ありあはせタル品物」
あり・あはせ（名） 有合 アリアハセタルモノ、アリアヒ、モチアハセ
あり・あふルこと 自下二 有合 アリアフヤウニス、
千五百番歌合、梅花懐ヲ人、神毎ニ有ル人ハ白ヒトリケリ」

ありあり 盛 疎翠ニ立ツ浪、ありノ降リ夏ヲ

ありあけ、ゆくゑ 有明袋（時毎ニ特出ル故ニ名アリシカ）花ニ行ク人ノ杖ナドニツケテ携フル袋、表ハ質素、裏ハ紅ニテ燈鐵、艾、カチタリ、コマメナド入ルトゾ（海録十二）

ありがたう 盛（ありがたく（なズ））ノ音便、唇キ意ヲ表シ又ハ別ヲ告ル時ニ用ル

ありがたし 形一 難有（一）アルコト難シ 稀ナリ、珍シ、生 制世 逢ヒカタシ、ダヒスクナシ、謝々珍重 後

萬ナセノ四十五「手離レモ帰後モカヤヌキ、コレヲ惜キテ後ハ安里我多之」（狩ノ意ニシテ）

源相撲三十四「ありがたき美貌人ニナムト奏シケルニ」 悔日抄、歌ノ感情ヲ詞モ孫ニ

ツクシテ「サノミ新タレクヨキトモ ありがたれば」 家物語四「孟嘗君ガ三

千客ノ中ニ、鼠ヲ為ントモ兵ヲ、鶏ノ鳴ク真似ヲ、難有ケレバ、鶏鳴ト言ケリ」 集條

法華経文珠師利「世尊是諸菩薩甚為難有」

（三）稀ナル恩、盛ズト云フ意ヨリ好ビテ、カタジケナシ、モッタイナシ、オソレオホシ 劇利 叨

史記抄（文明）十「疽ヲ吮ケバ、ありがたいト云テ一命ヲ棄テ」 同十四「コレハ漢

ヲ、ありがたいト思ハセジトテゾ」

ありぎぬの 枕 阿理好奴能（繊衣ノ形織ノ形ナルカ）

キタルいたまぎぬ（キヤリ）ノ清布ノ服ニテ其衣ノ裏ニ青ルキリ（質素ノ意）

三重ニテ、ハリ、裏トナル 袁ニ青ルキリ

京北下（雅望）ノ三十八「阿理好奴能三重ノ子ガ」（世尊ノ頁ニ名来女リ）カナヒノ

八「蜻蛉ノ、ありぎぬの子等」 同十四ノ三十四「安利ぎ奴乃さ宜を立沈ミ家ノ妹ガ物言ハズ

年ヲ思ヒ苦シモ」（妻ガ別ニ泣キヒヅミ、喧嘩クニカケテ云リ、同四ノ十五「珠衣ノ

さわさわ ゴツ」 [illegible] 三十九

ありまもけ 有西菅 根ぬの有西ニ 菅名 菅トス 一万十二ノ二十四 「人皆ノ好ニ

道ヲ有間菅」

ありーつく 白四 有附 (二) 住ニ馴レ住ミツツ、涙落セ、 (三) サル方ニ ありつきタリシ

アナタノ年頃バイフカヒナキサビシサニ目馴レテ」宇治拾遺、七「下ロナド出テ来テ、ツカハシ

ナドシテ、タダありつき居ツキニケリ」 (三) 身ヲ安ンズル所ニ取リツク、所情ヲ得、唐物語

「数サウサウ人トナルナドニ、父母世ニありつかムコトヲセギイトナム」 妻ムニありつく」 食事ニありつく

(く) 株中世

ありーつく 白四 有附 似合フ、ツキツキシクアリ、涙伝角ノ「 假粧ヒ見ニトハ、イトマジユク

ありつかず、ハシタナキコチコチシケニテ」 狭衣ノ史 (三) 老人ヒトリツ見シタルヲありつくべキウ

ニキノセヨト云ヲ」

あれ (感) 「あらノ略」驚キタル心ニ没ル感動詞、アナ、ヤラ、

あれ こしルトルレ 白下一 荒ル (一) 荒ノ口語 (二) 皮膚 (三) 肌理 (キメ) 「相撲ニナル」

冬時 (ハキ) 軍 (ハキ) 皮膚 (ハダ) 肌理 (キメ) 此性質ナルノ荒ルトス

東中 自四 阿礼衝

あれ (を) 生 生ルコトヲマ、「我ガ子ノバ皆人知ラズ 父ガ方 母ガ方トモ、神ノ知ラム」

神楽歌 韓神 (人綾) 一人 (一出) (ミヤビモ一出)

あれーねぎみ 荒保 荒レマ、仕保、我ガマニ振舞フ者、

あれーひき 阿礼引 み あれ ノ係ヲ

あれーや 荒屋 荒レタル家、アバラヤ 名史集 サ御ハラ、あれノ月ヲナムバ 風ハ云ト 歌モスサマジ」

あわ（泡）沫沫（空丸ノ異稱カ）うつろ、うろ（空）空形、うたかた（雨沫）ナドアリ

（一）水中ニ空氣ヲ含ミテ圓ク形ヒアリタル、ブクブクミナツボ、ミツボ、アブク

古事記、「阿和」（仮名）葉ニ厳音義ノ沫ノ阿和

（二）口ノ辺ニ噴キタル唾ノ玉ノ形シナセルモノ　泡　唾異記下ノ部「女口泡嗤出而死」訓釋「嘔、阿和」

（怒ル時、苦シ沒ル）（「あハヲ吹ク」）

（三）硝子ノキニ生ジタル空虫、氣眼（四）沫緒　異其條ヲ書

あわヲ食フ　狼狽（アワテ）（「つ條ヲ書」）

あわヲ吹カス　昔ヨリ弱キヲ、敵ニあわヲ吹カス」

あわしほ　白鹽（泡鹽ノ義、泡雪ト白ク、泡ナル）　純白ナル鹽　即チ常鹽ヲ堅鹽ニ

對シテ云フ、食鹽　本草和名上ノ九「鹵鹹、煎鹽、金下凝潴也、阿和之保、人常所食也」和名抄十六ノ八「白鹽、阿和之保、人常所食也」

あわたつ　白四　泡立　泡起ル

あわてふためく　白四　狼狽（ふた、踊躍ノほとト通ズ）　狼狽ヲ度ヲ失フ、ア

タフタス、書國策、六、「時徐ロあわてふためきテ參リシニ」

あわゆき　泡雪（一）ウハナヲ雪ヲ泡ニ譬ヘテ後　神代紀上二十二「蹈堅庭而

陷股若沫雪蹴散」（堅庭ト沫雪ト對セル）和名抄一ノ三「日本紀云沫雪、阿

和由岐、其弱如水沫」万ノ五十六「十月ニ降ル知ラズカモ」同ノ四十七

「沫雪ノコゴヒ繼キテカ降ラバ梅ノ花散リカ過ギナム（冬ノ詠ナリ）後ニ淡

雪ノ意トシテ春ノ雪トス（三）四　カードニアリ

あわわ（ワ）小兒ノスルアワ、口ヲ開キテ口ノ中ニテ叩キ叩キあ、聲ヲ發ス

府昌筑紙集（寛永）「蔵手ハあはヲスルカ山ノ口」長唄、面かぶり「とうかとうち

あわわ」

あわを 沫緒（文緒ノ轉ナリ）（二）鎮魂祭ニ宮内ニ奉ルコメ魂ヲ齋ト入レテ
絲ヲ縱横ニ十條カケテ結ビ緒ナラムカトスル職員令、神祇官鎮魂祭集解
江家次第鎮魂祭ニ見エ（山彦冊子三）魂緒モコレヨリ起リ後ニ手ムスビ結ビ等
お結ビナドモフモ此訛ナラムトスル三代實録（四貞觀三年八月）「偷児開神祇官庫」
三斷劇ヲ本書盜取（主上）御魂緒等ヲ「万四ノ五十五「魂ノ緒ヲ沫緒ニ搓リテ結ベラバ在リテ後
こも多いがラメヤモ」（三）特ニ赤ハ又糸ノ事トス 拾遺十六、雜春「春来レバ
澤ノ白糸イカナレバ結ベトモナホ乱レテ見エシ」 地草子、五、四十六「上氷ヲ
結ベル、紐ナレバ、カザス日影ニエルブバカリソ」 草根集（長禄）「川岸ヲ流ル、水ノ
あわを 沫緒 沫緒ノ（三）見ヨ （いとゝ搓ル沫ニ又春ノ青柳）

真名伊勢物語 沫緒（合搓ノ糸）

（三十九）

森むらや製

アヒル（名）南（今ノ朝鮮語ニ鴨（前ノ義）トスル）
三韓ノ後、みるみ、神功紀（四十九年三月）「南加羅」（南蛮地彌多礼）
あるいは（或）
あるきーいき 歩附（アルリハ、アルヒトリ、カレナミ） 歩調
アルパカ（名）（英語 Alpaca）南亜米利加洲産ノ綿羊ノ名 類
あるぱかノ毛ヲ木綿糸ニマゼテ織リタル織物、「あるぱか袴」
アルバム（英語 Album）馬真ヨリタル低ノ掛ニオク帖、
アルハベット（英語 Alphabet）西洋文字ノ字母、ABC等ナリ
あるみ 荒海（あらうみノ約） 荒海ニ向ヒ「白浪高キ荒海」（四十五ノ一）
「大船ヲ荒海ニ出ダシ」（万七ノ二十五「大船ヲ荒海ニ漕ギ出デ」）

ありきぞ　歩行社　貴人の生前ニテ後始メテ歩マスル儀式

陸信集賀「中納言親宗、解キ子ノ有キ宮ニ云ヘ」埴錦、宋、老浪「月御子

御有きぞめ上方里小路ニワタラセタマフ」

アルヒ（名）上　三輦後、おさし、條ニ見ヨ

あれ（名）阿礼　加茂祭ニ云フ後、みあれ、條ニ見ヨ

あれ、ひき　阿礼引　加茂祭ニ云フ後、みあれ、條ニ見ヨ

あれ（名）村（アリ）八在ト通ズルカ、在處ノ意ナラン（住地）　村ノ古言。

神武紀「邑有君村有長」景行紀、同ノ「邑ニ村之長邑之勿首」

聖武紀四年宣

あれ　新米、粉　ゴビリ

（和名抄十六ノ十四「新米、阿礼」）

あぬらふ　ぎみ　苔蘚　蘚　蘚ヲ異ヲ礼ニ作ル見モ、

（苔ノ異トス）

あを、うまくさ　青淀草　うまくさ（艸浮）ノ條ニ見ヨ

あを、うま　青馬（一）馬ノモ色ノ青白雑ヒルキノ駒馬

万二ノ二十「青駒足掻キヲ早ミ」内十二ノ二十九「駑馬」字鏡三十三「駑、駒、馬、白

色、又、青色、阿乎支馬」和名抄十ノ（五）「駒、馬、青馬也、青白雑毛馬也」

白馬（三）栗毛ノ馬ノ（三）白馬節会ニ用ヒル

あを、げ　青毛（四）馬、毛色名、クロミドリ　黒毛ノ潤澤アリテ青ミヲ帯テ

見エルモノ

あを、いろ　青色（一）青ヤ色（二）ミドリノ色、枕草子、四、段「六位ノ蔵人ノ青

いろナド着テ」（六位ノ袍ノ黄色ハ深緑ナリ）

△馬寮ヨリ馬（御監）毛附ヲ奏聞ス白馬の奏トモ

あをうまのせちゑ　白馬節会

（初ハ青馬ナリ　馬ハ陽数ニテ青ハ青陽ノ春ノ色ナリ後ニ白毛ノ馬トナリタレド尚旧例ヲ存シ白馬ト書キテあをうまト呼ビタリ）

陰暦正月七日ニ行ハレシ節会ノ一種。此日先ツ白馬ヲ覧ル（白馬ノ宴。）

儀アリ△左右ノ馬寮ノ官人（左右ノ馬寮ハ兵部省ニ属シ御厩ノ事ヲ掌ル）ヲ率キマタ主上正殿ニ出御アリテ御覧ゼラル。而シテ後ニ節会アルナリ。

（舎人ノ俗ヲ見ヨ）

万二千ノ五十八、天平宝字二年正月七日侍宴ノ詠「水鳥ノ鴨ノ羽色ノ（青ク序）青馬ヲ今日見ル人ハ彊（カヒナリ）（命）ナシト云フ」

続後紀、承和六年正月庚申「天皇御紫宸殿覧青馬」文徳実録、仁寿二年正月朔幸豊楽院以覧青馬、賜陽気也、賜宴群臣如常」日本紀略、天暦元年正月七日白馬宴（白馬ノ宴ノ初見カ）

（事行事秘抄正月）「十節会云馬性以白為本云々」

森むらや製

8

是日見白馬、即午中邪気遠去不来」康頼本草（下ノ二十六）「白馬、安乎支馬」

土佐日記、正月「七日ニナリヌ。同じ湊ニアリ。今日ハあをうまヲ思ヘドカヒナシ。唯渚ノミ

きゾ見ユル」兼盛集「陰ル雪ニ色モ変ハラデ雪ノモノ誰ガあを馬ト名ヅケソメケム」

（字孔抄「白馬、アヲウマ」）

あをうまのせちゑ　白馬、安乎支馬

あをに　「青煮蔵」ぜまいナドヲ青ニシテ失ハラズニ漬テスコト、銅ニ入ル、又錫ニテヨシ

青色ソノマヽナリ（料理面白三ノ巻）

あをにび　青鈍　にびいろノ俗ヲ見ヨ

あをによろり　青柳ノ異名

あを・な　青菜（一）ス、ナ、フユナ、タウナ、松　古事記下（仁徳）ノ巻「採二其地（吉備）之花菜一云々」山縣ニ蒔ケル「阿素那ミ云々」（二）蕪菜。持統紀、七年三月「蕪菜青」百十六ノ十七「簀薦敷キ蔓菁（アヲナ）持テ来」字鏡五十三「菁、阿乎奈」（下體ノ傍ニ見ヨ）本草和名下ノ三十五「蕪菁蔓菁、阿乎那」（三）雲菁（アヲニナ）其他野菜ノ総名、「青菜ニ塩、クタクタトナル」

あをいたどぶ　青板昆布　昆布ノ青ッコウ面ナラウ（アヲコブ）ミン、昆布巻ナド用ヰル、「昆ヒ」

あをこぶ　青昆布　あをいたどぶニ見ヨ

あをばもの　青葉者　「青端者」端者ノ義、青ハ青侍、青女房ナドノ青ニ同ジ、ナラズ、端者ハ半下者ニシテ仲間ナリ、長ナル（上）室町時代ニ下部、夫卒ナド称シタル語　甲陽軍鑑九ノ上「青葉者ヲ一人計ヲキ、槍先ニ迯ヲ附ケ」笠間書院刊本「四季ノ時分ニ白髪者ト中ハ下部ノコトナリ」

あをひえ　（ヒ）「竹刀（青朕ノ義カ）」（朕モヒエ古語ヒヱ（朕）ノ傍ニ見ヨ、青ハ青竹ノ義ナル）上

東竹ヲ削ギ作ル小刀、笹ノ類、独代化下ノ十七「以竹刀截其児臍」私記竹刀、阿乎比衣」和名抄十五七「阿乎比衣、言以竹刀剪之金銀薄也」竹刀

あをひとさ　「青人草」人民ヲ益々繁殖スル、就キテ云フ語、神代上ノ二十「粟稗麦豆云々、題見蒔生（天之蒔人草ノ義、蒔生）而以食而活之也」蒔生此云阿烏比等久佐」

古事記、神代上ノ十三「宇都志伎青人草」

あをび　青火　鬼火、イロレイビ、燐火

あをふしがき　青柴垣　青キ柴ノ垣　古事記、神代上ノ十四「青柴垣ヲ刺シ廻ラシ」

あをぼん　青本　ゑざうし（傍ニ見ヨ）

あをもみぢ　青紅葉　蘚苔ヲ愛ル高家ヤウヤ

あををんな　青女　宮仕ヘ女、平民ノ女
音妻鏡、治承四年九月廿日「夕深更、青女又来テ二條河原辻ニ陣ス」

あをりんご　青林檎　りんごト云フモ同ジ　あかりんご　對ル名ナリ

あをま　白馬ノ約　あをうまのせちゑノ日　公卿殿上、清涼殿、馬節會、或ハ青馬ノ節

「舞トモ申スナリ、云云」

万葉ニノミハ
古義ニテハ
紀伊ノ
アラフシカキ

あをうまのせち　白馬奏　あをうまのせちゑノ日

あをうるし　青漆　セイシツ　青漆ニ同ジ

あをがきやま　青垣山　青山ノ垣ノ如ク圍ヲメグルモノ　畧シテ、アヲガキ
「アヲガキ山ニ神サビ居タリ」　ヤマトタケル
古事記ノ歌ニ　大和ニ
出雲国造神賀詞ニテ出雲国ノ青垣山ノ内ニ下津磐根ニ宮柱太敷キ立テ」
（昌行紀、十七年青垣山ノ内ニ下津磐根ニ宮柱太敷キ立テ）
古事記上ノ巻ニ「後ノ青垣東ノ山」（御諸山）　一万六ノ十三、芳野ノ宮ハタヽナヅク青垣コモリ」

あをカン　青羹　色ノ青キ羊羹、青粥ナドカヘ義ス

あをくも　「青雲」　大空　青々ト見ユル雲ニテモ　空ト云フニ同ジ、アヲゾラ、碧空

大殿祭祝詞「高天原ニ青雲ノ雨霧ノ極ミ」

あをじそ　青紫蘇　紫蘇ノ葉ノ表裏　緑色ナルモノ

あをしょせい　青書生　年若ノ學生未熟ナル書生　白面書生

あをぶくれ　青筋（一）青色ノ線（三）人ノ皮膚ニ透キテ青ク見エル靜脈ノ色、烈シク怒ル時ハ顔ニ鮮ヤカニ星ニ「青筋ヲ立テ、腹立ツ」（紅葉金平ノ芝居ヲ見ヨ）

あをがさ　青傘　日傘ノ蔭ノ淋低ニテ點ルモノ　萬金屋業代表（寶保）青傘「此頃ノバヤリユトミテ蔭ノ淋低ハ一ツ流行リ」陰傘トモ

仕様、紅葉金ノ真ヤリ物好ノ仕始メ　今ノ爾傳「医師ノ中ヤガラ取リアツカ」

あをたーぼう　青田原　あをた（青田）ぼう（坊）

あをたん　青紙簞ノ雅其俗ヲ見ヨ

あをーべらたん　青紙簞（二）ぺらたんノ生ナモノ（三）顔ノ長クテ青白

キ人ヲ嘲リ呼フ語、墨ヒケアガ

あをーてんじやう　「青天井」「青空ヲ天井ト見ル意」家ノ外ナルコト、野天、露天

「青天井ニ草醬」

（コレニ對シテ東洋ノ草醬ヲ草醬ト云フ野蒜ノ草醬ノ意カ）